
気になるアイツは.....M男！？

槇沙織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気になるアイツは…… M男！？

【Nコード】

N7752L

【作者名】

槇沙織

【あらすじ】

彼氏いない暦〃歳の数、という女 京野琴海。きよのこのみ

ある日、彼女は思い切って告白してみよう と決意する。

しかし、目を付けた人物は物凄く人気がある人であった。

更に、彼には思いもよらぬ秘密があつて……？ 「私、こんな展

開望んでませんっ！」 『恋愛初心者マーク』である彼女の

恋が、今始まる。 こちらは、サイト「Honey Mouse」

から転載しています。

れんあい【恋愛】とは。

「意」男女が互いに相手にひかれて愛しあうこと。

携帯辞書から抜粋。

私の名前は京野琴海。

彼氏いない歴〃年齢の数という、独身女の22歳（処女）。

別に中学高校が女子校というわけでもなく、男子も普通にいる共学であつた。

ただ、告つた事もなければ、告られた事もなく……いいなあーと思う人は『お友達』止まり。

そんな事がずーっと続いて、今まで異性と付き合う事なく過ごして来た。

やっぱり、友達が彼氏を作つていちやこらしてるのを見ると、私も彼氏が欲しいなあーと思う。

素敵な恋愛がしたいっ！

って、誰だつてそう思うじゃない？

だから、気になった人が出来たら先ずは思い切つて告白してみよう！ と考えた。

しかし、だ。

いざ告白しようと思っても、私が気になる人はほとんどが『彼女有り』。

何故なら　。

好きになる人が、ほとんどイケメンだから。

確かに、私自身、自分が思っている以上に面食いだと思う。

友達にも、「レベル高っ！」って言われたし。

顔が良ければ内面もいいとは限らないが、普通の人よりカッコいい人に目が自然に行ってしまう。

ある友達に、「彼女がいたとしても、気持ちだけでも伝えてみたら？」と言われたが、絶対嫌だと断った。

理由の1つとしては　平々凡々の外見で、自分が相手にとって魅力的に思える部分を何1つ持っていないからだ。

そんな私が、美人な彼女がいる人に告白した所で、絶対振り向いてくれるはずもなく、こっぴどくフラれてお終いに決まっている。

そんなこんなで、私は高校を卒業してからこの年になるまで、誰ともお付き合いする事なく過ごして来た。

で・も！

この世に生を受けて22年と3ヶ月。

漸く私にも遅い春がやって来ようとしていた。

先日、アメリカにある支店の方から、モデルの様にカッコいい人がやって来たのだ。

そりやもう、女性の皆さんの目はその人に釘付けになりましたよ。いつも以上にメイクが気合い入ってるし、用事が無いのにその人の所に行つては気を引こうと躍起になっていた。

まあ、無理も無い。

彼 アレク・クロフォードさん（27歳）は、襟足と前髪が少し長い、プラチナシルバーの髪。見れば引き込まれそうなターコイズブルーの瞳が特長的。

身長は西洋人らしく、190cm。スポーツをしているのか、細身だけどなよしている感じがしない。

中性的な顔立ちだが、だからといって女っぽいわけでは無く、意外と中身は男前。

仕事をする時の真剣な表情は、クールでカッコいい。

しかし、一旦仕事から離れると、柔らかな表情で周りの人達に接していた。

それに、遠くにいても聞こえて来る少し低い声は、腰にくるくらい艶やかだ。

そんな眉目秀麗で人当たりが良く、仕事出来るのに今は『彼女無し』で、尚且つ高給取りだという人を放っておく人がいるであろうか。

いや、いない。

現に、我が社1の美人と言われている香川みのりさんも、彼を狙っている噂になっていた。

ハッキリ言つて、私が告白しても99%の確率でフラれるだろう。

まあ、すっごい好きって訳でもないし、告白して振られたらそれ

までだ！

私はそう思うようにした。
でも。

もしも……もしも、奇跡が起きて、残りの1%という確率で彼と付き合えたなら、

小説にも負けないような、素敵な恋愛をしたいと　この時の私は考えていたのであった。

告白をしよう。

と、思ったはいいが……

チラリと視線を室内の中央に向ける。

そこには、数人の美女達に取り囲まれているクロフォードさんが見えた。

ち、近付けない……

クロフォードさんにいざ告白しようと思っても、彼の周りには何時も数人の人がいて、話し掛ける事さえ出来ない。

いいなあー、私も彼と話してみたいなあー。

と彼らを眺めていたら、

「琴海、そんな難しそうな顔して、何見てんの？」

隣の席のあっちゃん 原田あつ子が、不思議そうな顔をして私を見ていた。

「あ、あっちゃん。いや……別に何でも……」

「何でも無さそうな顔をしていたから、声を掛けたのよ。一体何を見て……」

「……………」

「はっはあーん」

あっちゃんは、私が見ていた方向 クロフォードさんがいる方に視線を向けてから、にやにやした顔で私に振り向いた。

うわあー……なんつー顔をするんですか、貴女は。

少し身体を引いた私を気にする事も無く、あっちゃんはニシシと笑った。

「これまた、随分とレベルの高い方に目を付けたもんだこと」

「うっ……」

「で？ どうするの？」

「……どうするとは？」

「だから、あの銀髪キラキラ男に、どうやって告るかって事」

「……まだ決めてない」

あっちゃんは、私と同じ時期に入社した同期だ。

彼女は大卒。私は高卒入社なので年齢はあっちゃんの方が上なのだが、研修期間に意気投合してからは、親友の様にずっと仲良くしている。

そんなあっちゃんは、私が『面食い』である事を知っていて、イケメンの『彼女無し』の男がいたら即告白します、という宣言も聞いている。

だから、クロフォードさんを見詰めていた私が、彼に告白すると気付いたのだ。

「早くしないと、他の雌豹達に横から搔っ攫われるわよ？」

机に肘を置いて、頬杖を付きながらそう言ったあっちゃんに、私は頬を膨らませた。

「だあーって、彼に声を掛けようにも、常に数人の人が周りを取り囲んでるのよ？ 声を掛けるどころか……告白なんて無理だよ」

ガクーンと頂垂れる私に、あっちゃんは「まあ、頑張れ」と、とてもアッサリとした反応を寄越した。

私はもう1度、他の人達と楽しく喋っているクロフォードさんを見てから、溜まっている仕事を片付けるべく、パソコンに視線を戻したのであった。

気になる人が出来ると、その人の事を1日中考える様になる。
仕事をしてても、その人の声が聞こえると、一瞬にして意識がそ
ちらの方へ飛んでいく。

『皆とどんな話をしているのかな？』

『どんな女の子がタイプなんだろう？』

『もう、気になっている人とかいるのかな？』

とか、いろいろと考えてしまう。
パソコンに数字を打ちながら、ふと、思い出し笑いをしてしまっ
た。

以前、彼が1人で楽しそうに、指でペンをくるくる回す（凄い高
速回転だった！）ところを見たり、ブラック珈琲を飲んでいる様に
見せかけて、実はシュガーを何本もコッソリと入れているところを
見てしまった事がある。

意外と子供っぽい所があるんだな、と思ったが、他の人達が知ら
ない彼を知れて、ちよつと嬉しかったりした。

彼の恋人になれたなら まだまだ知らない、彼の本当の姿を知
る事が出来るかも知れない。

って……恋人云々の前に、まず初めにやるべき事があった。
彼を取り巻く美女軍団に気圧されて、話すどころかしつかりと目
を合わせた事も無いのだ。

多分、彼は私の事なんか知らないと思う。

パタリ……とパソコンの前に突っ伏す。

どうしたら、彼に告白出来るんだろう……。

彼は女性だけではなく、その明るく気さくな性格で男性にも人気があった。

仕事中は別として、朝の朝礼前や休憩時間などは女性陣が彼の周りを陣取っており、帰りは帰りで、男性陣が彼を飲みに誘ったりして、1人でいる事はまず無い。

どんよりとしながらパソコンを叩いていると、あっちゃんが「ねえ、琴海」と声を掛けて来た。

何？ と顔を横に向けると、あっちゃんが今度は真面目な顔をして私を見ていた。

「私は、琴海が誰と付き合おうと反対はしないよ」

「うん」

「ただ、彼がこの会社の中でかなり人気が高いという事を忘れないでね」

女の嫉妬は、怖いよ？

「……嫉妬」

「そう。自分より劣っている人間が、彼と付き合っているなんて知ったら……かなり陰険な方法で虐められるかもよ？」

「……………」

自分より劣る人間……って、もしかし無くても私の事？

何気に酷い事を言われたような気がしなくてもないが、私はあっちゃんが言った事をよく考えてみる。

人とお付き合いをした事が無い私は、今までそういった嫌がらせを受けた事が無い。

よく読む少女漫画や小説などでは。

『学生編』

下駄箱に入れていた靴に画鋸が大量に入れてあったり、靴自体が無くなっていたりする。

ロッカーの中に入れていたジャージが、ボロボロになっていた、机の上に「死ね。ブス！」と落書きされていたのもあった。

そして、机の中に入っていた手紙を開こうとしたら、中にカッターの刃が仕込んであって、指を切って流血。

『OL編』

いきなりお茶組み係りに回されていたり、仕事のミスをなすり付けられて上司に怒られる。

狭い給湯室の中で、秘書系の綺麗な人達に囲まれながら「どんな手を使って彼を誑かしたのよ、この淫乱！」などと罵倒され、終いの果てには女性の皆さんから総スカンを食らう。

まだまだ沢山あるが、もややんと頭の中で再現されたモノに、顔面蒼白になる。

「怖っ！」

「そうよ、女の嫉妬は怖いのよ」

それでも、告白するの？　と聞かれた私は、うーん……と考え
るも、「うん、告白してみる」と言った。

「だって、告白したからといって、彼と付き合える訳でもないんだ
し」

気持ちだけ伝えられたらいいの、と言うと、あっちゃんは肩を竦
めた。

「まあ、琴海がそれでいいと言うなら、反対しないよ」

頑張んなさいと言ってくれるあっちゃんに、私はうんと頷く。

あっちゃんはそんな私を見て、ふふふと笑ってから、もう1度ク
ロフォードさんに視線を向けた。

途端に、今までの真剣な表情がガラリと崩れ、むふふ……と笑う。

「でもさあ、アレクみたいに日頃は温厚なタイプに限って、本当
はDSかもしれないわよねえ」

「……DS？」

「そつ。サディストって意味よ」

「ええ？」

また貴女は急に、何を言うんですか。

「あら、おかしい事じゃないわよ？　男の60%以上はSだって聞
いた事があるし、それに、「アレクにだったら苛められたいつ！」
って言う女性は多いわよ？」

「どうしてそう言えるの？」

「更衣室でそう言っているのを聞いたし」

今は『俺様男』が人気なのよ？　と言われ、私は「ふーん」と
言う事しか出来なかった。

確かにそういった小説や漫画があるのを、見た事がある。

そついったモノを読んでいると、世の中の男は全員『S』なんじ

やないのだろうかと思えてくる。

嬉々として『俺様男』を語るあっちゃんに適当に相槌を打っている。

「それに、耳元であんな美声で囁かれたら……堪えないわよね」

あっちゃんの言葉に、私は溜息をつく。

彼があっちゃんが言うような『S』な性格なら、もしも付き合えたとしても長くは続かないかもしれない。

だって、私は皆が言うように、好きになった人に酷い事を言われて、嬉しいと思えないし。

まあ、苛めは苛めでも、愛情がある苛めなのだろうが……私は好きになった人には優しい言葉を掛けて貰いたいし、優しく接して欲しい。

普通は、そう思うものじゃないのだろうか？

しかし、あっちゃんが言うには、「長く付き合っていれば、優しくさだけじゃ足りなくなる」のだそうだ。

新しい刺激を求めるものらしい。

そういうものなのかな？

と思っていると、「京野、ちょっと……」と声を掛けられた。

顔を上げて呼ばれた方向へ顔を向けると、部長が手を振って私を呼んでいた。

「はい、今行きます！　ごめん、あっちゃん。ちょっと行ってくるね」

「はいよ」

私はあっちゃんにそう言つと、今までパソコンに打っていた内容を上書きしてから、部長の元へ歩いて行った。

部長の所に「はい、何でしょう？」と行けば、細かい文字がビッシリと書かれたメモ用紙を渡された。

何だろうこれ？ とメモ用紙に視線を落していると、

「そこに書いてあるモノを、資料室から持ってきて欲しいんだ」

部長はニコツと笑ってそう言った。

「ええーっと……これを、全部……ですか？」

「うん。悪いんだけど、今日中にお願ひ出来るかな？ 明日の午後の会議に、急に使う事になってしまったね」

今日中に資料の中身に目を通しておきたいんだ、と言う部長。

「あの、こんなに数が多いと、探すのに少し時間が掛かってしまいますが」

だって、全く別の階の資料室に置いているものまで、ここに書かれているのだ。

「京野さん1人に頼むんだから、それは仕方がないよ。今日中に私の元に届けてくれればいいから」

大変だと思うけど、やってくれるかな？ と部長に言われた私。

もちろん、「嫌です」なんて言えるはずもなく……。

「分かりました」

「宜しく頼むよ」

「はい。それでは失礼します」

私は溜息を吐きたい気持ちをグツと堪えて、部長から資料室の鍵を預かると、自分の席へ戻った。

椅子に座って漸く「はふうっ」と息を出すと、あっちゃんに「どしたの？」と聞かれた。

一旦パソコンの電源を落とし、あっちゃんにメモの中身を見せながら説明してあげたら、「うわぁ、ご愁傷様」と言われた。

「……それじゃ、行つてきます」

「ガンバッ！」

その言葉に頷きながら私は席を立つ。

そして、メモに書かれている資料を取りに行くべく、歩き出すのであった。

「うっうっ。お・も・いつ！」

頼まれモノを探して早2時間が過ぎた。

私は、分厚いバインダーが何冊も入ったダンボールを両手でガツチリ持ちながら、えっちらほっちら階段を上っていた。

エレベーターを使えば早いのだが、今日はエレベーターの安全点検日の為使えない。

なんてツイてない日のよっ！

鼻息荒く階段を上る私。

今は誰にも会いたくないわ と思っていると、漸く目的の階にまで辿り着いた。

「ぐはぁーっ……腰が痛い」

一旦ダンボールを足元に置き、腰をトントン叩く。
背筋を伸ばしてから、胸元のポケットに入れていたメモを取り出す。

「ええーっと、次はこの階の第二資料室ね」

メモをもう1度胸ポケットに入れると、「ふんぬっ！」と掛け声を掛けて重いダンボールを持ち上げる。

がに股になりつつ、長い廊下を歩き続ける。こんな姿、絶対他人には見られたくない。

「ぜえーっ、はぁーっ、と言いながら5分ほど歩いていると、プレートに『第二資料室』と書かれた部屋のドアが見えて来た。

「こっ、ここだわ！」

私は扉の前に立つと、周りに誰もいない事をもう1度確認してから、

ダンッ！

ダンボールを思いっきりドアにくっ付けた。

それから右足を上げてドアに膝をくっ付けると、ダンボールの底を上げた足の上に置いて、ずり落ちない様にした。

私は自分の胸と足とドアを使ってダンボールを落ちない様に固定すると、右手だけ離してスカートのポケットに入れていた鍵の束を取ろうとした。

「よっ、ほっ、はっ……取れたあ！」

ポケットの入り口で引っ掛かっていた鍵を取るのに、四苦八苦し
ていたが、何とか取れた。

私はそのままの体勢で右手だけを動かし、鍵を開けようとしたの
だが。

ガチャッ。

「え？」

突然ドアノブが回ったかと思ったら、ドアが内側に開いた。思いつき前のめりになってドアに体重を掛けていたので、当然。

「うひゃああゝ！？」

私は右足を上げた体勢のまま、資料室の中へ倒れ込んだ。

急に内側に開いたドア。

ドアに足を掛けていた私は、そのままの体勢で室内に倒れ込む。片手と片足で支えていたダンボールは床に落ち、ファイルがバラバラと散らばる音がした。

うきやあああ！？

倒れる！ と思った私はギュツと目を瞑りながらも、急いで上げていた足を地に下ろした。

「いゝい……っ」

すると、右足が何か硬いようで柔らかいモノを踏む感触がした。パンプスの少し太いヒールの部分で何かを、ぐにゅーっと踏んだらしい。

ん？ 今なんか頭上から何か聞こえたような？

と思つて目を開ける前に、体がスッポリと何か温かいモノに包まれた。

「ほえ？」

何が起きたんだろうと目を開けて顔を上げると、そこには。

痛みを堪える様にして顔を顰める、クロフォードさんの顔が直ぐ目の前にあった。

余りにも近くにある整った顔に、ピキンッと固まる。

何？ 何が起きているの？

今まで近付きたくても近付けなかった人が、直ぐ目の前に！という思ってもみなかった状況にアワアワしていると、彼が「うぐう……っ」と呻いた。

その呻き声にハッと我にかえる。

そろりと、見惚れる様な綺麗な顔から視線を下に向けていくとまず、私の両手は彼の胸に添えられるようにして置いてあり、それよりも下に視線を落とせば、私の腰周りに彼の腕が回されていた。ビクビクしながら、視線を更の下 足元の方へと向けると……。クロフォードさんの足 黒い靴が、私のパンプスのヒールに押しつぶされ、グニヤリと変形していた。

ひいひいひいひいっ！？

さあーっ と顔から血の気が引いた。

だって、今の私は少し前屈みでクロフォードさんに寄り掛かっているの、彼の左足の先に私の全体重が乗っているのだ。

何度が満員電車の中で足を踏まれた経験をした事があるが、あの時の激痛は涙が出るかと思っただほどだ。

「すすす、すみませんっ！」

急いで彼の足から自分の足を退けようと、身体を離そうとしたのだが……何故か、クロフォードさんは、離れようとする私を自分の元に引き寄せた。

体が更に密着する。

頬が上質なスーツの生地に当たり、彼が付けているコロンの香りがフワリと香る。

腰に回されていた腕は、苦しいほどに私を締め付ける。

何が……起きているの？

呆然としていると、クロフォードさんがフツと息を吐いた。

吐息が旋毛に当たり、体がピクツと反応する。

彼の胸元から頬を離し、ゆっくりと顔を上げると……。

白い肌が薄くピンク色に色付き、少し長い前髪の隙間から見える、綺麗なターコイズブルーの瞳は熱を持ったように潤んでいた。

そして。

まるで、愛しい恋人を見詰める様な表情で、私を見下ろしていた。

あまりにも色つばいその表情に、心臓の鼓動が早くなる。

男の人にそんな表情を向けられた事がない私は、この状況をどう対処したらいいのか分からなかった。

暫く2人で無言で見詰め合っていると、彼はゆっくりと瞳を閉じ、艶やかな溜息を落としてこう言った。

「はあああ……気持ちいい。……ねえ、もつと……強く踏んで？」

もつと……強く踏んで。

今のは幻聴だろうか、と思いつつ、はふう〜と艶やかな溜息をつく彼の顔を見上げる。

目に入って来たのは、ターコイズブルーの瞳を隠す、髪の色と同じプラチナシルバーの睫毛だった。

うわぁー、凄く長ぁ〜い！ 羨ましいなぁ……、とか思いながら見続けていると。

クロフォードさんの目がパチリと開いた。

あつ、目が合った。

「……………」

「……………」

暫し、2人で見詰め合う。

よく見ると、彼の目には今まで私を見詰めていた様な
もったものがキレイに消え去っていた。 熱の籠

そりゃもう、キレイさっぱりと。

「あのう……クロフォードさん？」

「…………… あつ」

クロフォードさんは目をパチクリと瞬かせると、今自分が何をしていたのか思い出したのであろう。

サーツと顔が青くなった。

ピンク色の肌から白い肌に戻り、次に青くなったのをポカーンと眺めていると。

「うおっ!？ あ、その……ごめん! ……って、うわあ
ああ!？」

クロフォードさんは驚いた声を発すると、私の腰からパツと腕を外し、慌てながら離れようとしたのだが。

自分の足が私に踏まれている事を、彼は忘れていた。

私に足を踏まれた状態で、上体だけが後方に傾いて行く。それはもう、スローモーションのようにゆっくりと。

「うわわわわ!？」 と言いながら、腕をグルグル回して何とか体勢を整えようとするも どう見ても、持ち直すのは無理な状態にま
でなっていた。

危ないっ!

私はそんな彼を助けようと手を伸ばしたのだが……。

彼が倒れる寸前に、足の上に乗せていた右足を、ひょいっと上に上げてしまった。

踏んでいた足の支えが無くなった結果、彼の奮闘も虚しく、勢いよく後ろに倒れた。しかも、倒れる途中に近くにあった机の角に頭

をぶつけていた。

右足を軽く上げ、手を伸ばした状態で暫し固まる私。

助けようとしたのに、なぜか足が勝手に上がっていた。

多分、巻き込まれて一緒になって倒れるのを、無意識に避けた結果であろう。

私って、意外にも薄情？

そんな事を考えていたのだが、床で頭を抱えて悶えているクロフォードさんを見て、我にかえる。

「だ、大丈夫ですか！？」

慌てて駆け寄り、彼の横にしゃがんでオロオロと顔を覗く。

机の角にぶつけて相当痛かったのか、クロフォードさんはギョツと目を閉じて「ううーっ」と唸っていた。

ガンッ！ と凄い音が聞こえたから、そりや痛いだろうとは思いますが、ぶつけた場所が場所なので、私は「気分が悪かったりしませんか？」と声を掛けながら、彼の後頭部にそっと手を当ててみた。

そこには。

大きなたんこぶが、やぁ！ と顔を覗かせていた。

あまりの大きさに、ぎょっと目を見開き、頭から手を離そうとしたのだが、彼の手がそれを阻んだ。

驚きながら彼の方に目を向けると、

「んん、あっ……触るの、止めない、で……」

私の手首を掴みながら、トロン、とした目で私を見上げてそう言った。

「え？」

「……………うん？ ……あっ……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

又しても、無言の時間が静かに流れる。

しかも、今度は気まずい空気が私達の周りを取り巻いていた。

「あ、あのお……………クロフォードさん？」

「な、なんだい？」

思い切つて声を掛けると、心なしか、彼の表情は引き攣っている様に見える。

ドキドキしながら、私は思っていた事を聞いてみる。

「あの、クロフォードさんって……………痛いのが好き、なんですか？」

「え？」

「あ、違っていたら御免なさい！ ……その、先程足を踏んでいた時も『もつと踏んで』と言われていたので、そうなのかなあ？」

と、思いました」

最後の方をもごもごしながら言っていると、突然クロフォードさんが笑い出した。

急に笑い出した彼に、もしかして打ち所が悪かった？ と驚いていると。

私の手首を掴みながら、ゆっくりと起き上がる。

クロフォードさんは起き上がると、クスクス笑いながら私の顔を覗き込む。

「ねえ、こんな俺を見て……引いたりしないの？」

そう聞いてきたクロフォードさんの顔は、笑っていたが……瞳は、何かを恐れている様に揺れていた。

「いえ、別に、引いたりはしませんけど……そのお、ちょっと驚きました」

「ちよつと？」

首を傾げ、きよとした顔で聞いてくる彼の顔は、意外にも幼く見えた。

そんなレアな表情を見れて、少し嬉しくなる。

ホントは、ちよつとどころか、かなり驚いたんだけど……それは言わなくてもいいだろう。

そんな事を思っていると、クロフォードさんがポツポツと話し出した。

「俺は、外見がこんなだからいつも周りに女がいてさ……女を選ぶにも、選り取り見取り状態だったんだ。……だから、と言う訳でもないんだけど、13歳から今の歳になるまで、彼女がいなかった事なんて無くて……」

それは自慢ですか？ と突っ込みたくなるが、彼の話は続く。

「でも、何故か付き合う彼女のほとんどが、俺にSadism……加虐性的な事を求めて来るんだ」

その言葉に、私は「ああ、そう言えば……」とあっちゃんと言っていた事を思い出す。

「クロフォードさんの声で苛められたい、と言う女性が多いって聞きましたね」

「そうなんだよ。普段気の強い女性に限ってその傾向が強くてね。ベッドの中で俺が言葉責めするだけで、蕩けそうな表情をするんだ

けど……俺はそんな彼女の顔を見ても、満たされないんだ」

「……………はあ」

「どちらかと言えば、思いつ切り冷めた目で見られながら、耳元で囁かれる様に言葉で責めて欲しいぐらいなのにあ」

「……………」

手首を掴まれたまま、急に他人のベッド事情を聞かされても、私は何て言ったらいいのかわかりません。

しかも、何気に凄い事を言ってますん？

「あの、つかぬ事をお聞きますが……クロフォードさんは、『S』……ではないんですか？」

思った事を聞けば、彼は瞬きしてから、「いえいえ」と、首と片手を振ってこう言った。

「俺は、Masochist……つまり、『M』なんだ。それも、“ド”が付くほどの」

何か吹っ切れた様な顔をして、『ドM』宣言をしたクロフォードさんは、

「でも、演技としてなら、『S』にもなれるけどね」と、爽やかな顔をしてそう言った。

ギシギシいう身体を引きずるようにして、会社から帰ってきた私。漸く辿り着いた築35年の、ちよつとボロツちいアパート。

玄関の鍵を開け、誰もいない部屋に向かって「ただいまあゝ」と言いながらパンプスを脱ぎ捨て、家の中へ入る。

電気のスイッチを入れると、暗い部屋がパツと明るくなった。

女の1人暮らしにしては少し広い、2LDKの部屋。

大家のおばあさんが、私のおばあちゃんと知り合いの為、格安価格で借りている。

私はコートのボタンを片手で外しながら、鞆とコンビ二の袋を机の上に置き、もう片手で脱いだコートをハンガーに掛け、それからパソコンの電源を入れて、スーツからゆったりとした室内着に着替えた。

ヘアバンドで前髪を上げると、私はそのまま台所に直行する。

クレンジングで化粧を洗い落としてスッピンになると、顔についている水分をタオルで優しく押さえて拭き取る。

「ふうー、サツパリした」

コットンに付けた化粧水を肌にポンポンと叩きつつ、冷蔵庫の中にあるミネラルウォーターを取り出して一気に飲み干した。

グビ、グビ、グビ、グビッ……………ぷっはあゝ!!

「げふっ」

誰もいない女の子の1人部屋。ゲップも普通に出てしまう。

まあ、人がいるときはしないので、悪しからず。

私は新しく取り出したミネラルウォーターを手に持ちながら、パソコンの前にドカリと座る。

「さ、て、とあゝ。先ずは何を調べましようかね？」

私は近くのコンビニから買って来たおにぎりを頬張りながら、インターネットに繋ぐ。

一瞬悩んでから、私は『SM』のサイトを検索してみた。

10分後。

私は、パソコンの画面を眺めながら魂が抜けそうになった。SMと言うものには、ある程度の知識があった。……と、思っていた。

今まで。

しかし、私のちっぽけな知識は、今、粉々に砕け散った。

私は静かにパソコンの電源を落とす。

「……SMって、鞭や蠟燭や洗濯ばさみを使うだけじゃないのね」人差し指で胸元をグイッと引っ張り、自分の胸を見た。

私は先程見た画面の映像を思い出しながら、もしも“アレ”を自分の胸にしたらと考えてみる。

暫しの時間想像。

「いいやあゝ！ 痛い！ 痛過ぎるう！！」

両腕で自分の胸を庇う様にして身震いする。

私が見たSMサイトには。

女の人の胸の先っぽに、マチ針みたいなものが3本も（ここ強調

！）、ぶっすり刺されている写真が載せられていたのだ！

見ているだけで痛い。

あんな事をされて、ホントに気持ちいいのだろうか……？

私には分からない世界だわ！

うひーっという意味不明な声を発しながら1人で悶えていたが、はた、とある事に気付く。

そうそう。分からないのは、何もSM世界だけではなかった。

あの『アレク・クロフォード』と言う人間も、私にとっては訳の分からない人間であった。

私はおにぎりを食べながら、資料室での事を振り返る。
あの後。

DM宣言をしたクロフォードさんを呆けた顔をして眺めていた私であつたが、床に散らばるファイルを目にした私は、自分が何をしに此処に来たのか漸く思い出した。

掴まれていた腕を振り払うようにして立ち上がり、散らばったファイルを急いで拾い集め、それをダンボールの中に入れ直す。

途中、クロフォードさんも手伝ってくれたので、彼にお礼を言いつつ、この資料室に置いてあるファイルも探し出して、ダンボールに入れる。

「あの、手伝って頂き有り難う御座います。助かりました」

私はペコリと頭を下げてから、ダンボールを抱えて部屋から出て行こうとしたのだが、

「ねえ、琴海ちゃん。俺達、付き合わない？」

ドアの前に立ち塞がり、ヒョイと私の手の中からダンボールを取り上げたクロフォードさんが、そんな事を言った。

どうして私の名前を？ とか、あんなに重いダンボールを軽々と持ち上げるなんて、やっぱり男なのね とか、そんな事を思っていたのだが、口に出した言葉と言えは。

「て、丁重にお断り致します」

で、あった。

人生初の告白であるが、それを速攻で断る私。

数時間前の私であれば、舞い上がって即OKしていたと思う。

何せ、今の今まで自分から告白しようとしていた相手なのだから。

しかし、先程から彼の知られざる本性を見たり聞いたりしている
と、『これは私の手には負えない人』だと気付いたのだ。

クロフォードさんには、私の様な凡庸な人間ではなく、SMで言
えば『女王様』の様な人が必要なのだと思った。
なのに……。

なにゆえ私をご指名で！？

もしかして、私をからかっているのかしらと思いつながら彼を見上
げると　そこには、真剣な顔をしたクロフォードさんがいた。

彼の瞳には、また、あの甘く蕩けそうな熱がもっていた。

「……どうして駄目なの？」

「ええつと……それは、それは……」

「それは？」

ダンボールを持ったまま距離を縮めてくる彼に、私はふらつきそ
うになりながら後ずさる。

驚いて何も言えない私に、クロフォードさんがふつと笑った。

「ねえ……付き合おうよ、琴海ちゃん」

身を屈め、私の耳元で囁く甘い声。

ゾクゾクした感覚が、身体中を駆け巡る。

身を竦めて下がれば、私が離れた分の距離を更に詰められ、彼の整った綺麗な顔が間近に迫っていた。

背中に、資料棚の冷たい鉄の塊が触れる。後ろはどうやら行き止まりらしい。

驚いて目を大きく見開けば　彼は顔を少し傾け、ターコイズブルーの瞳を閉じて唇を寄せて来た。

「琴海ちゃん……」

彼の熱を含む吐息が、私の唇に掛かる。

キス……される。

キュツと目を閉じた私は　。

パンプスの尖った先で、彼の弁慶の泣き所（向こうずね）を思いつつつきり蹴り付けた。

「うがぁ!？」

ガスッ！　という鈍い音と共に、ピタリと動きを止めたクロフォードさん。

まさか、蹴り付けられるとは思ひもなかったのだらう。中腰のまま固まっている。

私は、緩んだ彼の腕の中からダンボールを奪回すると、蟹も顔負けの素早い横歩きで彼の横を通り過ぎる。

火事場の馬鹿力とはこの事であろうか。

私は重いダンボールを持ったまま、片手でドアを開け放つと、それから両手でダンボールを持ち直して素早く廊下に躍り出た。

クルリと資料室に向き直り、蹲って足を押さえているクロフォードさんに声を掛ける。

「私、貴方とは付き合えません。……価値観が違い過ぎるので、上

手くやっていけないと思うんです」

それでは、と言ってからペコリと頭を下げ、両手が塞がっていた為、足でドアを閉めた。

キィ……パタン。

ドアが閉まる乾いた音が、静かな廊下にいやに響く。

私はすうつと深呼吸すると、急いでその場から離れるべく、持てる力を振り絞って長い廊下を歩いて行った。

その後は、残りの資料を全て集めて部長の元に届け、むくんだ足を揉みつつ、就業時間まで頑張ってお仕事をした。

暫く経ってからフロアに戻って来たクロフォードさんは、涼しい顔をしながら仕事をしていた。

彼が、何度も部屋の中央から私に向けて、熱い視線を向けていたのは分かっていた。が……あえて無視していた。

触らぬ神に祟りなし、である。

ミネラルウォーターをゴクゴクと飲みながら、はふう〜と息をつく。

「本気で彼の事を好きになる前に分かって……良かった」

もしもクロフォードさんの本性を知らずに告白していたら、えらい事になっていた。

私の恋愛に対する淡い夢が、壊されてしまう！

『M』だからイヤって言うわけじゃあないけれど、彼は私が理想とする彼氏ではない事だけは、確かである。

彼じゃなくても、他にカッコよくて彼女無しの優しい男性はいるはずだ。……多分。

その人に私は告白しよう。うん、それがいい。

クロフォードさんの事は、もう忘れよう。

と、そんな事を思っていた私であるが……。

世の中自分の思い通りに物事が進まない事を、翌日学ぶ事になる。

公園のベンチに座り、私は項垂れていた。

快晴の青空なのに反して、私の周りにはドロドロとした重い空気が渦巻いている。

そんな私の周りを、雀がチュンチュンと鳴きながら飛び回っていた。

いつもなら可愛いと思う鳴き声も、今は疎ましい。

雀から視線を外し、少し離れた場所にある自動販売機に目を向けると　公園の噴水で子供達を遊ばせているママさん達の、熱うーい視線を集めているクロフォードさんがいた。

「うーっ。何でこんな事に……」

頭を抱えながら悶えていると、両手に小さなペットボトルを一つずつ持ったクロフォードさんが、こちらに戻って来るのが見えた。

どうやら、お気に召した飲み物が買えたらしい。

キラキラと輝く笑顔で私に近づくクロフォードさんを、どんよりとした表情で迎える私は、本日何度目か分からない溜息を深々と吐いていた。

今から数時間前　。

「京野さん、今日からクロフォード君の下に就いて働いてくれ」

朝の朝礼が終わった後に部長に手招きされて、「何でしょう?」
と伺えば、そんな事を言われた。

はい? と首を傾げると、部長は自分の隣にいるクロフォードさんを指差して、「今日から、彼の下に就いて働いてね」と言ってくれた。

いきなりなんでそんな事に!?

驚愕しながらチラリと彼に視線を向ければ、爽やかスマイルをも
らってしまった。

その瞬間。

鋭い視線がグサグサグサグサツ!! と私の背中に突き刺さる。

殺気の籠もった鋭い視線を生まれて初めて向けられた私は、ゴク
リツと息を呑みながら、そーっと後ろを振り向き パツと前に向
き直る。

私の後ろでは、彼の周りをいつも取り囲んでいる美女軍団が、ギ
ラギラした目で私の事を睨んでいた。

こ、怖いよぉー!

ビクつきながら、部長に私以外の人に頼めないか聞いてみるも、
別に難しい仕事でもないんだよ? と言われた。

「クロフォードが必要とする書類を集めたり、外回りの時には、荷
物を持つて一緒に回ってくれればいいだけだよ」

「あのおー。お言葉ですが……それでしたら、私ではなくても、他
の方でもいいのでは?」

私がそう言うと、背中に刺さる視線が少しだけ緩くなる。

その事にホツとしたのも束の間、「でも、これはクロフォードた
つての願いでね……」と言う部長の言葉に、緩んだ視線が先程より
も更に鋭さが増した様な気がした。

ひひひひひひひひ!!?

「ぶ、部長……あ、の……」

「それに、昨日クロフォードが探していたモノを、一緒に探して見付けてあげたそうじゃないか。その事もあって、是非に、と言う事らしいよ？」

そうだったよな？ とクロフォードさんに確認する部長に、彼は「はい」と頷いた。

部長を見て頷いたクロフォードさんは、私に視線を合わせると、「昨日は、大変お世話になりました」と言って笑った。

「京野さんの人となりを見て、私の仕事を手伝って頂くなら、この方だと思いました」

「え、ええ！？」

一体何の話ですか！？

私は彼の言葉に、目を白黒させる。

お世話になったって？ 私の人となりを見たって……何の事！？ そんな事をグルグル頭の中で考えていたのだが、ハタと気付く。

『お世話になる』 彼の足を踏んだり、蹴ったり、頭に出来たタコを触ったりして、彼に快感を与えた事。

『私の人となり』 痛みの快感に酔いしれる彼を見ても、ドン引きしたり、蔑む事などをしなかった。

私は頭を抱えなくなった。
心の中で、

あ、あれはお世話になったって言わないわよー！！

と叫んでいたが、現実には口をぱくつかせていただけであった。

そんな私を見たクロフォードさんは私に1歩近付き。

「これからよろしくね、琴海ちゃん」

にっこりと笑ってそう言った。

この時からだ。

この時から、私はこの爽やかスマイルが怖いと思うようになった。

「はい、琴海ちゃん。ミルクティーでよかったです」

丁度回想が終わった頃に、クロフォードさんが戻って来た。

「あ、はい。……有り難うございます」

良く冷えたペットボトルを受け取り、頭を下げた。

顔を上げれば、ニコリと素敵に笑うクロフォードさんのお顔が間近にある。

スィットと顔を横に向けて、その微笑から目を逸らす。

部長の命令で彼と共に働く事になった後の美女軍団の反応が、今頭の中で蘇って来た。

「急な事で悪いんだけど、これから梶原商事に行くから付いて来て」とクロフォードさんに言われた時の、あの美女軍団の視線！

私の体は、この鋭い視線で穴が開くのでは？

と思えるほどであったが……この麗しい顔を見れば、皆様方の反応も頷ける。

会社に戻ったら、またあの鋭い視線を浴びることになるのか……

と溜息を付いてから、ふと、彼は何を買ったのだろうと手に持っているペットボトルを見れば　手に持つ缶コーヒーの、ロゴの下に小さな文字で『無糖、ブラックコーヒー』と書かれているのが見えた。

どうやら彼は、外に出てもブラックコーヒーを買っているらしい。コーヒーを一口飲んで「美味しいね」と言っているが、口に入れた瞬間、眉間がピクツと動いたのを私は見逃さなかった。

苦手なものを、何でそんなに無理して飲むのかな？

「……あの、クロフォードさん」

「何？　琴海ちゃん」

「ブラックコーヒーが苦手なら、無理して飲まない方がいいんじゃないですか？」

「ぐごほっ！？」

急に咽たクロフォードさん。コーヒーが器官に入った模様。

ハンカチを手渡して背中を擦っている、咳が収まったのか、涙目のクロフォードさんが私を見上げる。

「こ、琴海ちゃん……どう、して……げほっ、その事を……？」

「……あの、以前クロフォードさんが、コッソリお砂糖を入れているのを見た事があって」

私がそう言うと、「うわぁー、見られちゃってたのか」と俯き、両手で顔を覆った。よく見れば、耳が真っ赤である。

どうやら、無理してブラックコーヒーを飲んでいたのを知られていた事が、相当恥ずかしかったらしい。

暫し、私達の間に無言の時間が流れる。

私は、ふう〜つと息を吐き、まだ飲んでいないミルクティーをクロフォードさんに差し出す。

「これ、良かったら口直しにどうぞ」

「……え？」

「口の中、まだ苦いでしょう?」

「ああ、うん。……ありがとう」

素直にお礼を言う彼の顔に、ドキッと心臓が跳ねた。

そう、クロフォードさんの顔は、私好みのカッコいい顔なのだ。
そんな風に笑い掛けられたら、グラついてしまう。

いけないわ、琴海！ この人は、私とは別次元に生きている人なのよ!!

そんな事を思いながら頬を叩いて正気に戻ると、私は書類が入って重くなったカバンの肩ひもを肩に掛け、ベンチから勢いよく腰を上げる。

「休憩は終わり！ さっ、そろそろ行きましょ」

「おぶっ」

身体の向きを変えようとしたら、変な音が聞こえた。
え？ と思つて斜め下に視線を落とすと。

クロフォードさんの頬に、カバンの底の角がめり込んでいた。

「す……すみませんでした」

赤く腫れた頬を摩っている上司に頭を下げる。

「もう大丈夫だから、気にしないでくれ」

「そういう訳には……」

鞆を両腕で抱えながら、俯くようにして項垂れる。

だって、上司の顔に鞆の角をメリ込ませてしまったんだもん。

初日からこんな失態をしてしまい、顔を上げられなかった。

そんな、しょぼくれる私の頭上から苦笑が聞こえてきて 頭に

大きくて暖かい手が、ポンツと載せられる。

そおくと顔を上げれば、少しバツの悪い顔をしたクロフォード

さんがそこにいた。

「いや、ホント、琴海ちゃんには感謝しているんだ」

人の頭を撫でながら、クロフォードさんは肩を竦める。

「まさか、あんな人が大勢いる所で『M』を曝け出す訳にはいかな
いからね」

「……………」

そう。鞆の角が頬にめり込んだ後、ちょっと“おかしくなった”

クロフォードさんを、誰も居ないベンチの方へと引摺るようにして
連れ込み、時間を掛けて正気に戻した私。

え？ どうやって彼を正気に戻したのだった？

それは……。

企業秘密です。

と、いつか……皆様のご想像にお任せいたします。はい。

「そういう訳で、これ以上謝罪は必要ないよ」

彼はそう言つと、両腕を上にも伸ばして「うう〜んっ」と伸びをした。

「さてと……それじゃあ、それそろ行きますか」

「あ、はい」

ベンチから立ち上がったクロフォードさんに習い、私も立ち上がる。

それから、これから行く梶原商事の事を歩きながら説明しようとしたら。

「ああ、別にそんな事はいいいよ」

と、言いながら歩き出す。

「え？ あ、いいとは……どういう意味で……？」

「ん？ ああ、今日は梶原商事さんには行かないから、いいよつていう意味だよ」

「は？」

「いやさ、普段会社にいると、周りが騒がしくて琴海ちゃんとゆっくりと話せないじゃないか」

「はあ、そうです……か？」

「だから、ゆっくりと琴海ちゃんと過ごせる時間が欲しくて、梶原商事に行くつていう事にしておいたんだ」

クロフォードさんはそう言つと、鼻歌を歌いながら目的地からドンドン逆方向へ歩いて行く。

慌てて追い掛けて行けば　　クルリと振り向いたクロフォードさんが、私の右手を取つて、そのまま歩き出した。

「ちよ、あの、手……」

「それよりもさ、琴海ちゃんケーキとか好き？」

「へ？ ケーキ……ですか？」

「うん、そう。ここから少し離れた場所にある『デュアリーネ』っ

て言うケーキ屋さんなんだけど」

奢るから行かない？ という言葉に、一瞬、手を繋がれているという事実も忘れ、ぐらりと私の心は揺れた。

だって、そのケーキ屋さん私が前から気になっていたお店で、常々入ってみたいと思っていた所だった。

本心は、行きたかった。美味しそうだし。奢りだし。

でも、今は仕事なんだから！ と頭を振って、甘々い匂いの誘惑からなんとか抜け出し、「いえ、食べません」と断った。

そんな私を見たクロフォードさんは、ちよつと残念そうな顔をするも、直ぐに元の顔に戻り、「じゃあ、今噂の〜」とか言って、梶原商事に一向に向かう気配がない。

「あのお、クロフォードさん？ 梶原商事には……」

「ここだけの話、梶原商事さんに、今日行く予定は無かったんだ」ニコつと笑うクロフォードさん。

「だって、梶原商事に行くというのは、琴海ちゃんとデートをする為に付いた嘘だし」

「嘘？」

「はあ。俺、こんなにゆつたりと過ごすデートって初めてだよ」と言い、更に彼はこう言った。

「今日は1日、琴海ちゃんとゆつくりと過ごしたいから、仕事は無し！」

は！？ と驚く私に、クロフォードさんは更に「だから、ボードに『直帰』って書いてきたんだ。ああ、心配しないで？ 琴海ちゃんの所にも『直帰』って書いておいたから」と言う。

「クロフォードさん！ そんな事したら駄目じゃないですか！ そんな事しても、私、全然嬉しく有りません」
「え、そうなのか？ 今までの彼女達なら、喜んだけどなあ……。それに、誰も俺達の事を見てないんだよ？」
悪怯れる様子もなくそう言った瞬間。

私の中で、プチッと何かが切れる音がした。

会社の人達に仕事をしていると見せ掛けて、外に出て遊ぶ。それを、今までの彼女達の様に、私も喜ぶとでも本気で思っているらし。

とんでもないわ！

そんな、彼女達と同類に思われた事に頭が来た。それに、誰も見ていないと思っても、意外な時に、意外な場所で、誰かに見られる という事がある。

誰も見ていない時だからこそ、きちんとしなければならないと私は思う。

私の手を繋いでいたクロフォードさんの手を、私は振り払う様にして離すと、驚くクロフォードさんに「私、会社に帰ります」と言っ
って踵を返した。

ゆっくりとしたいのなら、一人でして下さい。私は、会社に戻って仕事の続きをしますので！

一人で公園の出口に向かって歩き出した私に、「こ、琴海ちゃん！？」と慌てて後を追ってくるクロフォードさん。

クロフォードさんは「どうしたの？　俺、何かした？」と聞いてくる。

したから、私は怒っているのよ！

眉間に皺を寄せ、黙々と公園の出口に向かって突き進む。

その後ろを、クロフォードさんが少し困った顔をしながら歩いていた。

「ねー、琴海ちゃん」

「……………」

「ごめんね？　でも、こうでもしなきゃ、琴海ちゃんとゆっくり喋る事も出来なかったし」

「……………」

「琴海ちゃん、ホントごめん。……許して？」

人の顔を覗く様にして、私に許しを請うクロフォードさん。

……美女軍団がこの光景を見たら、私、殺されるかもしれない。

「ねえ、何か喋ってよ」

「……………」

「あつ、ちよつと待って、琴海ちゃん！」

私はプイツと顔を逸らして、更に歩く足を速める。

慌てて後を追うクロフォードさん。

何故私が怒っているのか、本当に分かっていないクロフォードさんに振り向き、キツと睨み上げる。

「私は、仕事をする為に貴方の下につきました。決して、貴方の暇つぶしかなにかに付き合う為ではありません……………って、何笑ってるんですか」

「え？ あ、いや……琴海ちゃんの怒った顔が、すごく可愛いなあ
ーと思つてね」

そう言つて、なでなでと頭を撫でられた。まるで小さな子供の様
に。

そりゃあ、１９０？のクロフォードさんにしたら、１５６？の私
なんか子供の様に見えるかもしれないけど……。

「もう少し冷めた目で見てくれるなら………もつと嬉しいな？」
頬を上気させて私を見下ろしてくるクロフォードさんに。

再度、私の中でプチッと何かが切れる音がした。

プリプリと怒る私の後を歩くクロフォードさんは、終始私のご機
嫌取りをする様に「琴海ちゃん、許して？」とか「ねえ、何か喋つ
て？」と声を掛けてくる。

それでも暫く無視し続けていると、彼も徐々に何も言わなくなつ
た。

「……………」

「……………」

無言のまま歩いていると、私の気持ちはどんどん下降して行く。

そおくと後ろを見れば、クロフォードさんは俯きながら私の後
を付いて歩いていた。

なんなんでしょう、この居た堪れない気持は……？

私の心がチキンなのか？

今まで「琴海ちゃん、琴海ちゃん！」と、人の周りをうろつきな
がら『琴海ちゃん』を連呼していた人が、急に口を噤んで暗い顔を
しながら私の後を歩いているのを見ると、何故か私が苛めている様

な気分になる。

.....

.....

.....

.....

.....

「……はあーっ」

何時までも怒つて、無視し続けるのも、そろそろ止めようかと思つた時　急に後ろから溜息が聞こえてきた。

ピタリと足が止まる。

私の子供っぽい態度に………呆れられた？

「あ、あの！ クロフォードさ……」

慌てて後ろを振り向き、彼に誤ろうとして固まった。

彼は右手で胸元を握り締め、はふう〜と艶っぽい息を吐き、うっとりとした瞳で私を見詰めてこう言った。

「……放置プレイも、なかなかいいモノだね？ 琴海ちゃん」

言葉が出ないとは、この事だろう。

私が悶々と悩んでいた時、どうやら彼は『無視』という『放置プレイ』に喜んでいたようである。

私は、ガツクリと力が抜けた。

「え？ あれ？ どうしたの？ 琴海ちゃん」

「いえ……何か、ちょっと疲れただけです」

そう、ちょっと疲れたの。

私のやる事なす事のすべてが、クロフォードさんを悦ばせる事に繋がるらしい。

公園から出た私達は、クロフォードさんが受け持っている何件かの契約会社に向いていた。

もちろん、その中には会社を出てくる為に口実に使った『梶原商事』も入っている。

勤務時間は、仕事をするための時間なんですっ！ 遊ぶ為の時間じゃありませんん！！ と説教をして、渋る彼に仕事をさせたのだった。

「琴海ちゃん、お腹空かない？」

最後に行った会社のロビーを出て、ふうーっと息を吐き出した時にそんな事を言われた。

携帯の時計を見れば、既に6時半を過ぎていた。

「あ、そういえば……」

例の美女軍団からの刺々しい視線に当てられ、お昼ご飯があまり喉を通らなくて半分以上残していた私は、言われてお腹に手を当てる。

「お腹、空きました」

今まであまり気にならなかったのに、言われたら猛烈にお腹が空いてきた。

キーボードに、クロフォードさんが直帰と書いてくれたので、もうこのまま帰ろうかなと思った時、隣を歩く彼に「ねえ、琴海ちゃん」と声を掛けられた。

「はい、何ですか？」

隣を歩く人が自分より凄く大きい為、首が痛くなるくらい見上げ

れば……にこーっと、笑顔全開で笑うクロフォードさんがこつ言った。

「琴海ちゃん、これから一緒に夕食でも食べに行こうよ!」

そう言つと、私の手を取り何処かへと歩き出す。

「え? あの、私は」

「何が食べたい? フレンチ? イタリアン?」

「いえ、私は家で」

「あ、中華も捨てがたいよねえ」

「あ、あの!」

「んん? 何? 琴海ちゃん」

「えつと……せつかく誘つて頂いたのにすみませんが……疲れたので、私は家に帰って1人で食べ」

「家で? それじゃあ、琴海ちゃんの手料理が食べられるって事!」

「いえ、そうじゃなくてですね……」

人の話を全く聞かないクロフォードさんに、頭が痛くなってきた。

私は眉間を揉みながら、もう1度彼を見上げた。

「あのですね? クロフォードさん。私は家で1人でゆっくりご飯を食べるのが好きなんです。それに……私は料理が不得意で、クロフォードさんが家に来ても期待する程のような料理をお出しすることが出来ません」

遠まわしに、「貴方と食事をするつもりはありません」と言つた

つもりだったのだが。

「あつ、そうなの？　じゃあさ、琴海ちゃん。俺の家に来て食べない？」

「は？」

どうやら、私の気持ちはちつとも彼に伝わらなかったらしい。

「こう見えて俺、料理得意なんだ。期待してくれてもいいよ！」

「いや、あの、だから私は帰りま」

「琴海ちゃん」

「は、はい」

これ以上クロフォードさんのペースに流されてなるものかと、繋いでいた手を離そうとした時　ピタリと歩みを止めたクロフォードさんが振り向く。

何を言われるのかと、緊張した面持ちで見上げる私に、真剣な表情で私を見下ろすクロフォードさんがゆっくりと口を開く。

「琴海ちゃんと、どうしても一緒に食事をしたいんだ。だから、少しの時間だけでもいいから……」

繋いだ手を１度解かれたと思ったら、自分の指に細長くて綺麗な指が絡めるように繋がられ　。

「琴海ちゃんのこれからの時間を……俺にちょうだい？」

熱く掠れた声で名前を呼ばれ、甘くて、少し艶を含んだターコイズブルーの瞳に、目が釘付けになる。

絡められた指先から、体全体に熱が発生する。

多分、『これからの時間』 〃 『ご飯を食べる時間』の事を言っているのだろうが……。

一瞬、プロポーズ？ って思ってしまった。
言葉と態度が紛らわしい。

卑怯よっ！

バツと顔を下にむけて、私は心の中でそう叫んだ。
だって、だって……私にとって、クロフォードさんの顔って超ドストライクなんだもん！

そんな顔で見られたら……彼の本性を知っているのにグラついてしまっとうっ！……！

琴海！ ここでグラついちゃダメよ！！ と心の中で自分に言い聞かすも……気付けば、膝を屈めて私の顔を見詰めるクロフォードさんに。

「いいよね？ 琴海ちゃん」

「……はい……」

自分の励ましも虚しく、アッサリと「はい」と頷いていた私。
こうして、私はクロフォードさんのお宅に行くことが決定した。

「琴海ちゃん、そのソファーにでも座って待ってて」
「あ、はい」

クロフォードさんの家に上がると、まず広いリビングに驚く。

床は木目調のフローリングで、ガラスのテーブルと黒革のソファ
ーが置かれている部分にだけ白くてフカフカの絨毯が敷かれていて、
大型のテレビとCDデッキ、それに、海外の小説などが置かれた本
棚以外は何もなかった。

生活感がまるで感じられない部屋の中で、辺りを見回しながらポ
カンと立ち尽くしていると、

「うひゃあ？」

右の掌に濡れた何かが押し付けられ、ビククリして後ろを振り向
けば。

「ワン」

「……………黒ラブちゃん？」

尻尾をフリフリ揺らす、黒のラブラドル・レトリバーが私を見
上げていた。

しゃがんで頭をナデナデすると、嬉しそうに目を細め、それから
バタリと倒れて仰向けになってお腹を出し、「お腹も撫でてえ」と
言うような目で私を見詰める。

その仕草が可愛く、笑いながらお腹を撫で上げれば、黒ラブちゃ
んはウツトリと眼を閉じて尻尾を床に打ち付けていた。

「エルダーだけズルイな」

黒ラブちゃんのお腹を撫でいたら、不機嫌そうな顔をしたクロ
フォードさんが、台所から体を半分だけ出してこちらを見ていた。

私服に着替えたクロフォードさんは、今、夕食の準備中である。

「あの、このワンちゃんの名前ってエルダーって言うんですか？」

「そうだよ。　って、ごめん。家に来る前に犬がいる事を言うの
忘れてた」

「ああ、大丈夫です。私、ワンちゃん大好きなので」

そう言ってから、「ね？」エルダー君」ともう1度お腹を撫で
れば、クロフォードさんは「…………ズルイ」と恨めしそうに呟きなが

ら台所へ戻って行った。

その姿を見た私は、ちよっぴりだけ緊張が和らいだ。

クロフォードさんの「料理が得意」と言う言葉は本当であった。ガラス製のテーブルの上には、ほかほかと湯気を立てる美味しそうなおかずが、数種類置いてある。

手前から　だし巻き卵、肉じゃが、さばの味噌煮、筑前煮、ほうれん草のおひたし、大根の沢庵漬、長ネギと油揚げが入った味噌汁……等々があった。

アメリカ人だから、ハンバーグとかステーキとかが出てくるのかと思っていたら、純和食料理の品々に目が丸くなる。

「日本料理を作るんですね、クロフォードさん」

「うん。あちらに日本人の友達がいて、そいつから色々教えてもらったんだ」

クロフォードさんはそう言いながら、緑茶が入った湯呑茶碗を私の前に置いた。

そして、水産系の会社に行った時に貰ったという、イカの塩辛を冷蔵庫から出してきた。

「俺、この頃イカの塩辛にハマってるんだ」

「……………そうですか」

イケメンの外人さんが、イカの塩辛を食す……人の嗜好をとやかく言うつもりはないが、なんか不思議な光景だ。

「さっ、食べて食べて」と言うクロフォードさんに「いただきます」と言ってから、私は彼が作ってくれた料理を食べだした。

あまりの美味しさに顔が緩む。

私のその表情を見て、クロフォードさんはホッとしたような表情をした。

それ以降、私達はたわい無い話しなどをしたりして盛り上がって

いた。

そして、時間はあつという間に過ぎていく。

「あつ、もうこんな時間なんですね」

ご飯を食べ終わると、クロフォードさんの子供の時の話をお茶を飲みながら聞いていた。

楽しい一時というものは、本当にあつという間に過ぎてしまうもので ふと、時計に目をやれば、時刻はもう11時を過ぎていた。「すみません、こんな遅い時間までおじゃましてしまって」

私が頭を下げると、「こちらこそ、こんな遅い時間まで引き止めてしまって悪かった」と謝ってきた。

家にまで送ってくれると言うクロフォードさんに、この時間ならまだ終電に間に合うので大丈夫ですと首を振る。

「ご飯美味しかったです。ご馳走様でしたと頭を下げてから、」さて、帰りましょ」とバックを取ろうと手を伸ばしたら。

「待つて、琴海ちゃん」

伸ばした手を、横から伸びて来た大きな手に突然掴まれた。

ビクビクして顔を横に向ければ、苦しそうな表情をしたクロフォードさんがいた。

「クロフォードさ きゃあっ!？」

一体どうしたのかと彼に声を掛けようとしたら、突然抱きしめられた。

「なななな、何!？」

「うきやあゝつ。と心の中で叫びながらもぞもぞと彼の腕の中で動くも、彼は離す気がないらしい。」

私の肩と腰の辺りに、クロフォードさんの腕がガツシリと巻き付いていて離れない。

クロフォードさんの顔が私の首筋付近に置かれていて、柔らかなプラチナシルバーの髪が、私のうなじをくすぐる。

ぎゅうっと、痛いぐらいの力で抱きつかれ、「んう……やあつ

……苦しい……」と言えば、少しだけ腕の力が弱まった。

急に何なのお？ と涙目になっていると、クロフォードさんがハアッと溜息をつく。

そして、私の体に回した腕を外さないまま、体だけを少し離して私の顔を覗くようにして見詰める。

「……琴海ちゃん。俺、君のことが好きなんだ」

そう言うのと、肩に回していた腕を外し、そっと……私の右頬を大きな掌で包み込む。

「遊びとか、そう言うんじゃない」

確かに、初めはそんな軽い気持ちで言っていたんだけどね、と苦笑する。

「俺の周りにいる女性って、仕事中でも誘えば喜んでついて来る人がほとんどでさ………琴海ちゃんのように、俺に向かって真剣に怒ってくれる人って……初めてで……」

そんな琴海ちゃんに惚れたんだ、と言われた。

間近にめちやくちや好みな顔があつて、それに「惚れた」と言われた私の思考は停止する。

ポカーンと口を開ける私に、クロフォードさんは更に顔を近づける。

「……琴海ちゃんは、今、付き合っている彼氏とかいるの？」
ふるふると首を振る。

「じゃあ、誰か好きな人がいる？」

これも、首を振る。

「俺の事、嫌い？」

嫌いではないので首を振る。

「じゃあ、どちらかと言えば好きな方？」

まあ、嫌いではないから……と、コクリと頷く。

「俺が作った料理、美味しかった？」

うん。すごく美味しかった。頷く。

「また食べたい？」

頷く。

「デザートも食べたい？」

大きく頷く。

「じゃあ、俺と付き合って？」

大きく頷く。

ん？

頷いてから、あれ？ と顔を上げれば　ぱああああつと、明るい表情をしたクロフォードさんが目に入った。

「あ……いえ、今のはまちが　むきやつ！？」

「本当！？　やったあー！！」

むぎゆううつと、又しても抱き締められる。

「琴海ちゃん……俺、一生大事にするから！」

クロフォードさんはそう言うと、私の顔を持ち上げ、その整った

綺麗な顔を近付けてきた。

初めて自分の唇に触れる他人の感触に、体が硬直する。

恋愛初心者な私は、キスも初めてなわけで……。

「んっ！」

なのに。

「琴海ちゃん……」

「んん……ふぁっ、ん……んむっ」

私のファースト・キスは 濃ゆういディープキスであった。

「……ん……もう、やあ……」

小説や漫画などでは、ファースト・キスはイチゴ味とかレモン味とか、果物っぽい味が書かれているのがほとんどであったが。

「つつはぁ……」

長く重なっていた唇が、漸く離れる。

私のファースト・キスは、だし巻き卵の甘い味であった。

06 (前書き)

長らくお待たせいたしました。

1度離れた唇も、直ぐに塞がれてしまった。

啄む様なキスが沢山落ちてくる。

たまに、頬や瞼、額にも柔らかな唇が触れるが、やっぱりココが一番いいというように、直ぐに唇に戻ってきた。

「んん……ふうっ……」

キスなんて初めてだけど……クロフォードさんって、キスがとっても上手なんだと思う。
だって。

とっても気持ちいいんだもん。

最初のように、舌がうにょろんって入ってきた時なんか、「うひやあああああ!？」と心の中で叫んでいたけど、今のうちに唇が軽く触れたり押し付けられたりするようなキスは、とっても気持ちいい。

だけど、

「ふむう……ん、ん、んっ」

長く塞がれ続けると、どこで息を吸ったらいいのか分からない。

息苦しくて、グググッと眉間に皺が寄った時 トントんと、鼻先を叩かれた。

うつすらと目を開けたら、クロフォードさんが唇をくっつけたま

ま目を細め、もう1度鼻先を指でトントンと叩いた。

鼻で息を吸えと言いたいらしい。

私は言われるままに、スウーッと鼻から息を吸ったのだが　ハ
タと動きを止める。

もしかして……いや、もしかしくても、このままの勢いで鼻か
ら息を吐き出したら……。――

私の荒い鼻息が、クロフォードさんの顔に思いつ切り掛かってし
まうのでは……？

そんなの嫌あ――！

首を振って唇を離そうと試みるも、大きな手が後頭部をガツチリ
掴んでいる為、動くことが出来ない。

それならと、距離をとろうと腕を伸ばしたり背中を反らしてみる
も、もう片方の腕が私の腰にきつく巻き付いている為、離れること
も出来ない。

「……ふあ……もう、や、め……ふむう！？」

なんとか唇を離して、もう止めてと言おうとしたら　口を開け
た隙間から舌を入れられてしまった。

いやああ、また来たあ――！

慣れない感触に涙目になっていると　。
「ふぐぐ――！」

腰に回っていた腕が移動して、背中を撫でながら脇腹のラインを
確かめるように撫でられる。

そして、そのままスルスルと胸の上にまでやってきた。

ぎょっと目を見開くも、目の前にいる彼は眼を閉じていて、何を

考えているのか分からない。

いや、考えている事は、多分1つしかないが……。
服の上から、胸を持ち上げるようにして揉まれ。

「んんっ！？」

人生最大最高の危機を感じ取った私は、この状況からなんとか逃れようと、周辺にあつた物を手当たり次第に掴み、

それで彼の頭を思いっきり殴った。

「ぐぼっ！？」

「はっふうっっ」

彼が離れた隙に、肺に溜まった二酸化炭素を素早く吐き出す。

胸に手を置き、荒くなった呼吸が落ち着くのを待つ。

暫くすると呼吸も落ち着いてきて、自分が手に持っている物に漸く気付いた。

右手に持っていた物は、厚さが10cm以上ありそうな厚い本であつた。

手に持つ本は、硬い表紙のハードカバーで……その本の角が少し凹んでいる。

「……………」

こんなモノで彼を殴ってしまったのかと、固まる。

ヘタをしたら、怪我だけじゃ済まされない事になっていたかもしれない。

手元の本から視線を外し、直ぐ側にいるクロフォードさんに目を

向けると。

彼は私に背を向けて、頭と口元を手で抑えて蹲っていた。

ディープキスの最中に頭を殴られた衝撃で舌を嚙んでしまったらしく……………頭の他に、お口の中も大変なことになっているらしい。

「あ……………あの、クロフォードさん？」

やり過ぎたと思った私は、彼の肩を叩きながら呼びかけてみる。呻き声を上げながら、ふるふる震えるクロフォードさんを見て、やり過ぎてしまったと後悔した。

しかし、私がそんな事を考えていたのに、彼は「あふう……………いい」と呟いたかと思えば、クルリと向き直って。

私の腰に抱きついてきた。

「ひゃっ!？」

腰に両腕を巻き付けられ、胸元に彼の顔が押し付けられた。中腰になったまま、胸元にあるプラチナシルバーの頭を驚愕の瞳で見詰める。

彼は私に顔を押し付け頬擦りをすると、潤んだ瞳で私を見上げてきた。

「やっぱり、琴海ちゃんは俺が思った通りの人だ」

そう言つと、ウツトリとした顔でこう言つた。

「もっともつと、俺を痛めつけて? そして、精神的苦痛を齎すよもたらうな言葉で罵って、冷めた目で汚い物でも見るかのように見詰めて……………」

その小さな足で、俺を踏み付けて？

その言葉に、ぞわわわわっつと全身に鳥肌が立つ。

私はひゅつと息を吸い込み、

右手を振り上げ、「いやあああ！！ 変態っ！ 離れてよおっ」

と叫びながらそのまま振り下ろし 硬くてぶ厚い本の背の部分でウツトリとした表情で私を見詰めるクロフォードさんの額を殴りつけていた。

「いやあゝ、ごめんごめん」

「……………」

バリエードの様に、黒ラブちゃん エルダーくんを抱き締め、クロフォードさんを睨み付ける私。

赤くなつた額を摩するクロフォードさんは「ホント、もう正気に戻ったから大丈夫だよ」と、苦笑する。

貴方の言葉は信じられません！ という風に無言のうちに睨み付ければ、彼は頭をポリポリと掻いた。

「……ホント、信じられないくらい、俺って琴海ちゃんの前では本性をさらけ出してるよな」

こんなハズじゃなかったのにな……と呟くクロフォードさんは、もう一度苦笑してから私の前に跪いて、真剣な顔してこう言った。

「俺のマゾ性をここまで刺激してくれる女性は、後にも先にも琴海ちゃんしかいない」

そんな真剣な顔をして言う台詞では無いのでは……？

微妙な気持ちになりながら固まっている私に、彼がスツと腕を伸ばして来た。

「琴海ちゃん……」

細くて長い指が私の頬を包み、そのままゆっくり移動して私の唇を親指で撫で上げた。私

「琴海ちゃんが何と言おうが……絶対離す気はないから」

覚悟してて、と耳元で囁くクロフォードさんに、腰が抜けそうになった。

そして、綺麗なターコイズブルーの瞳を見詰めながら、厄介な人物に惚れられてしまった と思った。

しかし、待てよ？ と考える。

彼のマゾ性を刺激するって……それは、もしや私が『S』だと言いたいのだろうか？

いやいやいや！ 私は『S』でも『M』でもありません。

私はNormal つまり、『N』ですから！

「疲れたあ……」

仕事帰りに、これから皆で飲みに行きましょ　と、しつこく俺の周りを付き纏う女性達から何とか逃れ、やっと心休まる場所（自宅）に帰って来る事が出来た。

自分で言っのもおかしい話だが、見た目が優れているというのも、そんなに良いものではない。

知らない人間が自分の彼女になっている事などしょっちゅうだし、ストーカーに付き纏われたりもする。

まあ、嫌な思いもしてきたが、それ以上にオイシイ思いは沢山している。

「……………もうダメ」

鞆を適当に床に投げ出し、ネクタイを緩めながらソファアの上に倒れ込む。

「ああ……………眠い……………」

うつ伏せから仰向けに向き直り、緩めたネクタイを外して床に投げ捨て、目を閉じながらスーツの釦を外す。

目を閉じれば　こちら（日本）で出来た、可愛い恋人の顔が直ぐに浮かんでくる。

「琴海ちゃん」

愛しい人の名前を呟けば、自然と口元が緩んでいくのが分かる。

初めて、心から『欲しい』と思った女。^{ひと}

大っぴらに言い触らすことが出来ない自分の性癖を知っても、普通に接してくれる心優しい 俺の恋人。

つい最近、（ある意味無理やり）琴海ちゃんを自分のモノ（あ、彼女という意味ね？）にした。

キスをした後、潤んだ瞳で見上げる琴海ちゃんは この俺でも加虐心が湧き上がる顔をしていた。

まあ、直ぐにブ厚い本で脳天チョップを食らって、『M』が出てしまったが……。

そんな愛しい彼女の顔を思い浮かべていると、だんだんウトウトしてきた。

「……………ヤバイ。このままだと、本当にここで寝てしまう」

そのまま寝たい誘惑に駆られるも、ここで寝たら風邪を引くと思いい、気怠い体を無理やり動かして寝室に向かった。

少し長い廊下をペタペタとスリッパの音を立てながら歩き、漸く目的の場所に着く。

寝室の扉を開ければ、直ぐに大きなベッドが目に入る。

そこへダイブしたい気持ちちをグツと堪え、ノロノロとスーツを脱ぐ。

ワイシャツとTシャツ、それに靴下を洗濯かごの中に入れて、クローゼットの中からスウェットのパンツを取り出してそれを穿く。スーツが皺にならない様にハンガーに掛けてから、消臭&皺取りスプレーを掛けた。

それらを全てやり遂げてから、俺はＴシャツを着るのも忘れてベッドの上に倒れ込んだ。

限界に眠い。

おやすみいゝ、と呟きながら枕に顔を埋め、ウトウトとしてきた頃。

廊下から、カツ、コツ、という音が聴こえてきた。

「……………」

枕から顔を上げ、開ききらない瞼をなんとか開けて、廊下へ続くドアを見詰める。

耳を澄ませ、意識を音のする方向へ向けると、

「……………靴音？」

どうやらその音は、誰かが廊下を歩いている靴音だと分かった。

泥棒？　と思った時　高い音を立てる靴音が、自分がいる寝室の前で止まった。

そして、カチャリ…………と、ドアのノブが回る。

ドアが全て開ききる前に、人の家に勝手に入った来た人物を捕らえようとベッドから飛び出す。

が、寝室に入って来た人物を見て、俺の体は動きを止める。

何故ならそれは…………。

「……………ここここ、琴海ちゃんっ!？」

そう、寝室に入って来た人物が、俺の愛する琴海ちゃんだったからだ!

非常口のマークの様な格好で固まる俺は、急に現れた琴海ちゃんにも驚いたのだが…………さらに、彼女の着ているモノを見て、目を見

開く。

なんとそこには。

超スケスケの、シースルーベビードールのネグリジェを着た琴海ちゃんが！

しかも、その下にはピンク地に黒とピンクのフリフリレースが付いた、エロ可愛いブラとショーツ。

太股には、黒のレースにピンクのリボンが付いたキャットガーターを付け、コサージュ付きのピンヒールミュールを履いている。

そして 手には乗馬鞭が握られていた。

「どっ、そ、こっ、うええ!？」

どうしてそんな格好でここにいるの琴海ちゃん。

と言いたかったのだが、驚きが大き過ぎて口が回らなかった。

そんな俺を見た琴海ちゃんは、恥ずかしそうにしながら俺の目の前にまで歩いて来る。

固まる俺に、悩殺的にエロ可愛い琴海ちゃんは、潤んだ瞳で俺を見上げながらこう言った。

「私……………大好きなアレクさんの為に、今日は一生懸命頑張ります!」

「へ?」

頑張るって……………一体何を?

首を傾げながら、「こ、琴海ちゃん？」と手を伸ばしながら声を掛けた瞬間。

ペシンッ！

「はうん！」

手の甲に走った気持ちイイ痛み、鼻から変な声が出てしまった。
「琴海ちゃんじゃ、ありません」

「は？」

きよとん、と琴海ちゃんを見下ろせば、彼女は掌で鞭をペシペシ叩きながら口を膨らませている。

「これから私は、アレクさん……ううん、アレクのご主人様になるのよ。だから、『ちゃん』付けはダメ！」

「ああ、じゃあ　琴海様とかご主人様……それが、女王様がいいのかな？」

「ちつがーうつ！」

「へ？　じゃあ、なんて呼べば……」

それ以外になにがあるんだ？　首を捻れば、琴海ちゃんはこう言った。

「京野さん！」

「……………」

ナゼに『さん』？　しかも、苗字だし。

不思議な発想の琴海ちゃん　改め、京野さんは、手はじめといった感じに俺の体をペシペシと軽く鞭で叩き出した。

何も着ていない上半身に、鞭のペチペチという音と刺激が心地イ

イ。

「ねえ、この位はどうなの？」

「もう少し強くても大丈夫　大丈夫です」

ペチンペチンペチン。

「これは？」

「……………ん、もうちょっと……………強くてもいいです」

「こっつ？」

ベチンッベチンッベチンッベチンッ！

「あ、んん…………その位で、ちょうど、はあ、いいかも…………ふう、うん？」

鞭で叩かれ、しびれるような痛みで目を閉じて甘い息を漏らしていれば、何故か鞭の刺激がピタリと止まる。

「こと　京野さん？」

「誰が、勝手に気持ちよくなっていいって言ったのかしら？」

「……………あ」

まるで、気分を害されたというように、京野さんは長い睫を伏せた。そして、

「こんなに堪え性がないなんて…………ホント最低」

「はうんん…………」

心底汚らわしいモノを見る様な目付きで見詰められながら、そこへ吐き捨てるかの様に言われた言葉に　。

俺の胸がトクンッ！　と、トキメいた！

今までの俺は、女王様気質な人（あえて言うならオトナっぽい女性）から言葉責めにされたり、縛られたり、ロウソクを垂らされたり、鞭で叩かれたりe t s……が好きで、よく、そのような女性がいそうなS Mクラブに密かに通っていたりしていた。

大人の魅力溢れる女性から、冷たい眼差しで見詰められるのに、よく興奮していた。

それ以外の人間には、あまり快楽を味わった試しがなかった。

だから、俺の性癖を知っても離れること無く、尚且つ性的欲求を高めてくれる人間は、大人っぽい熟れた女性だと思っていた。

しかし、目の前にいる女性によって、その考えは覆される。

琴海ちゃんは、それまでにはない高揚感とトキメキと　ほんの少しの背徳感を俺に与えてくれる。

何故背徳感を感じるのかというと………京野さん〃琴海ちゃんは、俺が見た感じでは、どう見ても外見年齢はまだ未成年の、可愛い女の子にしか見えない（胸とくびれとお尻は立派な大人）のだ。そんな琴海ちゃんが、エロ可愛い下着姿で鞭を持っていたんだよ？

もう、興奮しまくり！

「私を無視して考え事？　ずいぶん余裕があるのね」

一人でトキメキながらボーツとしていたら、それに怒った琴海ちゃんにお腹を蹴られた。

「うぐふっ！？」

ガラ空きになっていた腹にきた、いきなりの蹴りに、少し息が止まる。

でも気持ちいい……。

前屈みになつてお腹を両手で抑えていると、琴海ちゃんに肩を押されてベッドに倒れ込んだ。

ボスンツと倒れ込みながら、俺は首を傾げていた。

ピンヒールで思い切り人を蹴ると、下手したら皮膚に穴が開く危険がある。

それを琴海ちゃんは、相手に程良い痛みを与えつつ、尚且つ大怪我を負わせないように考えて蹴っていたのだ。

いつの間に、こんな高度なスキルを……？

もしや、琴海ちゃんが以前付き合っていた人物に仕込まれたのか！？ と一人で考えていると　ギシリ……とベッドが軋み、俺を跨ぐようにして琴海ちゃんがベッドに乗り上げてきた。

倒れそうで、危なっかしい彼女に手を差し伸べようとすれば、ペちり、と手を叩かれた。

「勝手に触らない！」

「あ、ゴメンなさい」

「だゝめ。もう許しません」

琴海ちゃんは、俺の手首を掴むとそれを頭上でクロスさせ、どこから取り出したのか、俺の手首に頑丈そうな手錠をガチャリと嵌めた。

「それでもう、私に触ることが出来ないわ」

そう言った琴海ちゃんは、俺の頬から首筋、鎖骨から胸までを乗馬鞭の先でユルユルと撫で、囁いた。

「これからが……お楽しみ時間よ？」

唇をペロリと舐め、エロ可愛い下着姿で俺の腹の上に跨る琴海ちゃん。

外見とは正反対な妖艶な姿に、俺のテンションは一気に上がる！！
一体、琴海ちゃんは何をこれからしてくれるんだ　　と思っ
てい

と、
ぺろり。

顔を舐められた。

へ？　と固まる。

俺の期待をよそに、琴海ちゃんは一心不乱に俺の顔をぺろぺろ舐
めるのだ。

「……………あ、の」

「ぺろぺろぺろ」

「こ、京野さ……………うわつぶ！？」

「ぺろぺろぺろぺろ」

「ちよちよちよ、ちよつと待って！」

「ん？」

「はあ、はあ……………京野さん、一体なにが……………へ？」

顔を振り、漸くぺろぺろ攻撃（まあ、嫌いではない）から逃れら
れた俺は、琴海ちゃんを見て驚く。

いつの間にか、琴海ちゃんの頭とお尻には、犬の耳と尻尾（黒色）
が付いていた。

しかも、身に着けている全ての物が、黒の色に変わっていた。

一体いつ着替えたんだ？　と驚いていると、そんな俺を尻目に、
琴海ちゃんは尻尾をフリフリ揺らしながら、二カツと笑ってこう言
った。

「アレク兄さん、おっはよう！　オレ腹減った。早く朝メシくれ！」

ここで、パチリと目が覚めた。

そして。

「ワンっ！」

人の顔を舐め回す、愛犬エルダーが視界いっぱい飛び込んで来た。

「え、エルダー？ 何でお前がここに…………… ってか、京野さんは！？」

人の上に乗っかるエルダーを降ろして、エロ可愛い琴海ちゃんが何処に行ったのかを探す。

しかし、琴海ちゃんは何処にもおらず、床に適当に投げられた鞆とネクタイがあるだけで、その他には皺になったスーツが眼に入るだけであった。

「…………… 夢かよ」

今までの事が、唯の夢であったことに肩を落とす。

朝メシ！ と吠えるエルダーを見詰めながら、「クソッ、目が覚めた原因はお前か。あともう少しでいい思いが出来たのに…………」と呟いた。

「はあ、あ、そうだよなあー。琴海ちゃんが、あんな格好をして俺の前に出てくれるはずがないもんな」

でも、エロ可愛い下着で乗馬鞭を持った琴海ちゃん…………… あれは癖になりそうだ。

夢じゃなく、いつか現実でもあんな格好をして俺をイジメて欲しい。

というのが、この日からの俺の願望である。

（後書き）

とってもとっても遅くなりました。

お気に入り登録が200件も！
ありがとうございます！！

「……ううん。どっちがいいかな？」

休日の朝早くから、私は両手に洋服を持ち、それを自分の体に交互に当てながら姿見鏡の前で唸っていた。

右手には、黒色のキャミワンピースと、その上に薄紫色で少しロング丈の、やわらかなニット天竺素材のカーディガンが掛かっている組み合わせの洋服を持っている。

キャミワンピースの、ティアードのフリルレースが可愛くて、自分の中ではかなりのお気に入りのお洋服である。

これに、黒のブーツを組み合わせる予定。

そして、左手には、パープル系のチェックチュニックワンピースにボアベストを重ね、レギンスをチョイス。

これには、ファー付きの編み上げショートブーツと、ボンボン付きのニット帽を被る、という組み合わせだ。

「んん……」

暫く鏡の中で自分とにらめっこしていた。

そもそも、なぜこんなにも洋服の事で悩んでいるのかと言うと。

アレクさんに、今日デートをしようと誘われたからです。

先日、晴れてアレクさんの『彼女』に（ある意味強引に）なった私。

クールな見た目に反して、言葉責めや痛いのが大好き　といった性癖を持つ、M男であるアレクさん。

そんなアレクさんではあるが、何かの拍子で暴走しなければ、いつも通りのイケメン外国人な訳で……。

自分でも、かなり現金な奴だなあ〜とは思うが、面食いな私は、初めての彼氏がアレクさんである事をかなり嬉しく感じていた。

だって、それ（Mな性癖）以外は、『顔良し、声良し、性格良し、ついでに背も高くても金もある』という、普通だったら絶対に手の届かない人だし。

とまあそんな訳で、

私は今、初彼との初デートで着ていく洋服選びで、悩んでいる最中なのである。

「むう〜……もうこんな時間か。化粧をする時間もあるし…………よしっ！ これにしよう」と

携帯の時計を見れば、家を出る時間が迫ってきていた。

私は悩みに悩んで、左手に持っていた服を着ることに決めた。

今日のデートは、私の希望で遊園地に行くことになったので、これでいいでしょう。

私は決めた服にワタワタと着替えると、途中半端にしたままのメイクを全て終わらせ、ニット帽を被った。

それからもう一度、姿見鏡で全身をチェック！

メイクOK！ 髪型OK！ 服装OK！ 持ち物も……OK！

「よし！ それじゃあ、行きますかあ〜」

バックを片手に玄関の鍵を持ち、私は部屋を出る。

アレクさんとの初デート。

何もかもが初めての事に、ワクワク感とちょっとした緊張感が私を包み込む。

外に出ると、今日は雲一つ無い快晴である。

私は、ルンルン気分でアレクさんとの待ち合わせ場所に向かったのであった。

私の家から徒歩20分くらいの所にある喫茶店に、私はアレクさんとの待ち合わせ場所を選んだ。

そこはあまり人に知られていない場所で、御歳70歳になるロマンスグレーなおじいちゃんが1人で営業しているの。

緩やかなクラシック音楽が流れていて、周りには緑豊かな植物たちに囲まれ　癒されます。

そう、癒しを求めて休日などはよくここに来ていている。
所謂、常連客です。

そんな喫茶店内で　おじいちゃんがコーヒー豆を挽いている音を聞きながら、私はカウンター席に座っていた。

予定していた時間よりもかなり早く着いた為、私は本棚に置かれている雑誌を時間潰しに読んでいた。

雑誌を見ながら携帯の時間を気にしながら見ていると　ドアのベルがチリンチリンと鳴った。

ハッとした私は、雑誌からドアの方へと視線を向ける。

「アレクさん！」

ドアから室内に入って来た人は、待ち焦がれていたアレクさんであつた。

私が声を掛けると、直ぐに私に気付いたアレクさんは、会社にいる時とは違う優しい表情で笑いながら私に近付いて来た。

そして、私が頼んで飲んでいたカプチーノを見ると、首を傾げた。
「お待たせ、琴海ちゃん。　もしかして、結構待ってた？」

「いいえ、思つたよりかなり早く着いちゃったんです。アレクさん

は時間通りに来ましたよ」

「そっか、待たせちゃって悪いことしたなって思ったよ」

アレクさんはそう言ってから、私の服装や髪型等を見て「いつも可愛いけど、今日は更に可愛いよ」とか「惚れ直した」とか「こんな姿他の男に見せたく無いな」とか、聞いているこっちが恥ずかしくなっちゃう事を何でもない様に言ってくれる。

女として、とても嬉しく思うが……。

向かい側でニコニコ笑うおじいちゃんが、気になってどうしようも無い私であります。

体温と顔の温度が徐々に上昇していくのを感じながら、少し残ったカプチーノをグビリと飲み干す。

「おじいちゃん、ご馳走様でした。 お会計お願いします」

「はいはい」

カウンター席から立ち上がり、昔風のレジスターが置いてある場所に向かってからお会計を済ませる。

又来ます、とおじいちゃんに挨拶してから、アレクさんと共に店を出る。

チリンチリンという音が聞こえなくなると、後ろを歩いていたアレクさんが私の手を取って指を絡めてきた。

「っ！？ …… あ、の？」

ビックリして斜め後ろを振り向けば、

アレクさんが甘い瞳（普段の3割増）で私を見つめていた。

私の顔の熱と心臓の鼓動が、ギューン！と一気に上昇する。
アウアウと口を開閉させながら、繋がれた自分の手と彼の顔を交互に見ていると、

「クスクス…… 本当に可愛いね、琴海ちゃんは。今ここで食べちゃいたいぐらいだ」

「へ？ 食べ？」

「うん、こっやってね」

アレクさんは繋いでいた手を自分の顔の高さまで持ち上げる。
スウッと目を細めた彼は、唇を手の甲へと当て口付ける。

あんぎゃあああああ！？

心の中で盛大に悲鳴を上げる。

なんとか声は出さなかった。というか、驚きのあまり出なかったのだが……。

そんな私を無視して、アレクさんはそのまま唇を肌に付けながら下に下りて行き。

手首をキック吸い上げるようにして、ちゅっとキスをした。

「いっ……んんっ！？」

チクリとした痛みと反射的に手を引っ込めたら、それを察した彼が手を離してくれた。

自由になった手を胸元に抱え込むようにして、アワワワ！？と慌てながら彼を見上げれば。

「ん？ ああ、今のは……俺がどれだけ琴海ちゃんを思っ

ているか、行動で表したのと」

変な虫が付かないように、印をつけただけ。

慌てて自分の手首を見れば　口付けられた場所に、赤い斑点が出来ていた。

これはもしかや……小説や漫画でよく読むキスマーク………だろうか？

手首を見て固まる私を無視して、もう一度人の手を掴み、指を絡めるようにして手を繋ぎ直すアレクさん。

見た事もない魅惑的な表情をして私を見下ろす彼を見ながら、その時、私はある事を思い出していた。

手の甲へのキスは　尊敬。

手首へのキスは　欲望の……キス。

目の前にいる人が、私にその様な思いを抱いている事に思考が停止する。

そんな私を見て、アレクさんはフツと笑うと　耳元でこう囁いた。

「今は、唇へのキス是我慢するから………後でいっぱいちょうだい？」

ボンツと顔が赤くなる。

「……………」

「それじゃあ、行こうか？」

アウアウアウアウ……と何も言えなくなる私を、ニツコリ笑いながら見下ろすアレクさんが憎い。

てくてくと手を引かれながら彼の後を歩きながら、唇のキスは『愛情』の意味を持つと言うことを思い出し、更に顔に血が集まってくる。

恋愛初心者の私には、こんなやり取りは慣れていないの。

彼はちょっと……いや、かなり上級者向けな彼氏なのではないのか？　と思う私なのであります。

02（後書き）

評価を下さった皆様、そして、お気に入り登録して下さった皆様。

ありがとうございます！

指を絡め、恋人繋ぎでドキドキしながら歩いていけば……。

あつという間に今日の目的地でもある遊園地に着いてしまった。

思っていたより早く着いたな～と思いながら、チケットを買うのに財布を取り出す。

しかし、ここは俺が出すよとアレクさんに止められてしまった。初めは、悪いのでいいですよと断っていたのだが、誘ったのは俺だからと強く言われ　ここはありがたく、お金を出してもらうことにする。

そんなこんなで、アレクさんと共に遊園地の中に入れば。

「……人が多いですね」

休日だからか、家族連れだったり、私達みたいなカップルが溢れ返っている。

見渡す限り、人・人・人。

……おえつ。

人酔いしそうです。

クラクラと目眩を起こしかけていると、

「琴海ちゃん、どこから行く？」

ギョツと手に力を入れ直したアレクさんが、パンフレットを見ながら聞いてくる。

私は軽く頭を振ってから、アレクさんが持っているパンフレット

の中を覗いてみた。

遊園地の広大な敷地内には、絶叫系のジェットコースター、くるくる回るメリーゴーランドやティーカップ、その他には幽霊が出てきそうなホラーハウスや、恋人達なら誰でも一度は乗ると思う巨大観覧車等が目についた。

「どこか行きたい場所とか、乗りたい物とかある？」

「あ、あの！ それじゃあ、私、これがいいです！」

それではと、私は一番興味が惹かれたモノに指を差した。

「……………これ？」

「はい！」

「……………」

何故かアレクさんの表情が固い。

「どうかしたんですか？」

「いや、まさか、琴海ちゃんがこう言ったモノが好きだとは思わなくて」

「小さな頃は苦手だったんですが、大人になるにつれて好きになりました」

だって、人目を全く気にせずに、思いつつつ切り叫べるんだもん。

そう、私が乗りたいモノは絶叫系だったのです。

一瞬、初めてのデートにはティーカップとかの方がいいかな？
とか思っただけど、同じ所をぐるぐる回っていると具合が悪くなってしまう。

酔って彼氏の前でリバース（吐く）するよりは、そっちの方がいいでしょう。

と、言う事で絶叫系を選んだんだけど……。

「あの、ダメ……でしょうか？」

ジーツとパンフレットを見詰める彼に声を掛ければ、即座にニッコリ笑って大丈夫だよと言う。

「ホントですか？」

「ああ。それじゃあ、早速そちらへ行こうか」

「はい！」

アレクさんはパンフレットを畳んでポケットの中へと仕舞うと、もう一度私の手を繋ぎ直して、絶叫系マシンの方へと歩いて行った。

「つくうう。楽しかったですう！」

色々なジェットコースターを6回連続で乗った後　私は出口付近で身悶えていた。

普段溜まっていたストレスを、叫んで解消したようなものだ。正に、

爽・快・感！

「アレクさんも楽しかったですか？」

「……………ああ、」

振り向けば、表情は微笑んだままなのに、顔色が心なしが悪い。

絶叫系は嫌いでは無いみたいだが、流石に連続6回は効いたようだ。

「琴海ちゃん、次は……ちょっと違う物を見て回らない？」

「あ、はい。そうですね」

アレクさんはそう言うと、ポケットから素早くパンフレットを取り出し、絶叫系の近くに何かがあるのか確認する。

「ああ、この直ぐ側にホラーハウスがあるな」

その言葉に私は固まる。

私は苦手な物が何個もある。

その内の1つが『暗い所』。

どれだけ苦手かと言うと 夜寝る時には、ベッドサイドに小さなスタンドライトを置いて、部屋を真っ暗な状態には絶対にしないくらい、『暗い』のは苦手なのだ。
なのに。

ホラーハウスⅡ 『真っ暗な空間』 に行くだなんて!?

「さっ、そうと決まれば、早く行こうか」

「いや、あの、私はちょっと……」

「ほら、琴海ちゃん。早く行こう」

「私、ホラーハウスは」

「ほらほら、離れて歩くと迷子になるよ?」

手を繋ぐのではなく、私の腰を抱き、アレクさんは人の話を一切聞かずにズンズンと歩き進める。

手を繋ぐ行為よりも更に密着する体勢に胸がドキメクが。

これから行くホラーハウスの事を考えると……違った意味で、私の胸はドキドキしてくるのであった。

ひゅゝ、どろどろどろどろ……。

ホラーハウスでお馴染みの音を聞きながら、私達は入り口の前に立っていた。

アレクさんのワクワクとした表情を見ながら、私は泣きたくなる。

あううう……入りたくないよ。

逃亡しようにも、アレクさんに恋人繋ぎをされた手でガッチリと掴まれている為、逃亡は不可。

こうなったら、直接交渉しかない！

「あの、あの！ アレクさん、やつぱり」

「はいっ、お待たせしましたあゝ！ 次のお客様、どうぞお進み下さい！」

手に力を入れ、彼の注意を引こうと試みようとした時 落ち武者の格好をした男性スタッフに、いいタイミングで遮られた。

「さっ、それじゃあ行こうか、琴海ちゃん」

「ううう……はい」

こうして、数十年ぶりに私はホラーハウスなるものに足を踏み入れたのである。

「っひいいい！？」

目の前に突然現れた、着物を着たおかつぱ頭の女の子を見て固ま

る。

あまりの恐ろしさに、繋いでいる手を自分の胸元に持って来て、ぎゅーっと握りしめた。

「う……っと、大丈夫？ 琴海ちゃん」

「は、はひ。大丈夫です」

ドッドッド、と早鐘を打つ心臓を押さえつつ、何とか頭を縦に振る。

その際、アレクさんが変な声を出した事を気にしている余裕は無かった。

女の子はニツコリ笑うと、すうーっと消えてしまった。

どこに行ったのか気になったが、繋いだ手はそのままに、アレクさんの腕に自分の腕を絡ませながら廊下の先へ進む。

恐怖心に呼吸が荒く、早くなり 視界も狭くなる。

ビクつきながら、廊下の角を曲がれば……。

「おねえーちゃん。あーそーばあー」

先ほど目の前に現れた、あのおかつば頭の女の子が……目から血の涙を流しながら、あはははと笑いながら近づいてくるではないか！
「ふぎやあああつ！？」

「あう！」

アレクさんと繋ぐ手に、んぎゅーっ！ と更に力が籠り 無意識に爪も立てていたらしい。

頭上から、また変な声が聞こえてきたが、

「いーや あー！」

私は後ろから尋常じゃないスピードで追いかけてくる女の子から逃げるのに必死で、悲鳴を上げながら反対側の廊下へと駆け出す。

アレクさんは私に手を引かれながら、「はう！」とか「あぐうつ！？」とか変な悲鳴を上げていた。

そんな感じで、私達はホラーハウスの中を叫びながら懸命に移動

していた。

途中、足を掴まれたり、頭上から降って来た変な物体に頭を触られたりしていたが、その度に私は奇声を発したりしながらアレクさんに抱きついていたりしていたのだった。

もう、恥ずかしいと思う暇がなかった。

怖いー！！ 怖すぎるよー。

私は目を瞑り、アレクさんの腕にくっ付きながら思った。

何で、お金を出してまで、こんな怖い思いをしないとイケないのかと。

ホラーハウスに入る前に、トイレに入って本当に良かった。

そして、もう二度とこんな所には来るまい。

半ベそをかきながら、そんな事を思っていたら、

「はぁ、はぁ、はぁーっ。……もう、終わりだから。大丈夫だよ」

息を切らした感じのアレクさんに、頭を撫でられながら出口はもう直ぐだと言われる。

はて？ そんなに走ったかな？ と首を傾げるも、恐怖心で鈍った心は鈍感になっているらしく、そこは何とも思わなかった。

アレクさんが言う通り、もう出口が近いのか、周囲が大分明るくなってきた。

「出口だ！」

「うん。頑張ったね、琴海ちゃん」

「はい」

やっと、この恐怖から開放されると 気を抜いた瞬間。

天井から、何かが逆さ吊りのまま落ちて来た。

「うっ お おお あ ああ あー！」

顔が所々溶けたゾンビの顔が、顔面すれすれにある。
ドロリとした緑色の皮膚。

右の目玉は飛び出し、左は真っ黒の空洞になっている。

私は近くにいたアレクさんに飛び付いて（その時、私の頭と何かがガツンとぶつかった）抱きつく。

「あぎやあああああ、あ、あ……あ……はふう」

今までに無い程の悲鳴を上げながら、私の意識はブラックアウトした。

ざわざわとした喧騒に、意識が浮上する。

重い瞼を徐々に関ければ、暗闇ではなく、青空が見える。

「ああ、起きた？」

「……あれ？ここは？いままでホラーハウスにいましたよね」

「ホラーハウスはもう出たよ。出口の前で、琴海ちゃん意識を失っちゃったんだよ」

「え？それは……ご迷惑お掛けしました」

人通りが少ない木陰に置かれているベンチで、アレクさんの肩に頭を預けて寝ていた私は、恥ずかしくて顔が熱くなってくる。

肩から顔を離せば、心配そうな顔をしたアレクさんが私の顔を覗く。

「それより、気分は？気持ち悪くない？」

「はい、大丈夫です」

「それは良かった」

ニコッと笑うその優しい表情に、釣られて私も笑いそうになった時、ふと、アレクさんの顎が赤くなっているのが目に入る。

「あれ？ アレクさん……顎、どうしたんですか？」

私がそう聞いた瞬間、彼の瞳が熱を持ったように潤む。

うっ！？

私、何かいけないスイッチ押しちゃった？

口元を引き攣らせていると、私を囲むようにして背凭れに両手を付けたアレクさん。

麗しいお顔が接近中！

近い近い近い！ と背凭れに思いつ切り顔を反らせるも、限度がある。

ふうっと、熱い息が首元に掛かった。

「琴海ちゃん、俺……あんなに焦らされたの初めてだよ」

「へ？」

「気付いてなかった？」

アレクさんはフフフと笑うと、私の目の前に左手を持って来た。

何だろう？ と目を細めて見てみれば 彼の指や手首には、うつすらと赤い手形が付いており、手の甲には、くつきりと爪の形が付いていた。

「……………」

これはもしかや……と、伺うように視線を上げれば、ウツトリとした瞳とかち合う。

「そう、これは琴海ちゃんに付けられた跡だよ」

その言葉に、どんだけの力でアレクさんの手を握っていたのよ私！ と心の中でツッコむ。

慌てて謝ろうとした時 アレクさんが手首に唇を寄せ、赤くなつた跡をぺろつと舐めた。

アレクさんが手首を舐める仕草がとてもエロく見えて、ドキッ！
っと心臓が高鳴るが、

「琴海ちゃんが驚いて叫ぶ度に、程よい痛みが断続的に続いて……
もうホントにたまらなかったよ」

続く言葉に、心臓の音も平常のリズムに戻る。

そうだった。この人はこういう人だった。

忘れていた彼の性癖に、ガックリと頂垂れる。

そんな私にお構い無く、彼は頬を染めてこう言つのであった。

「でも……出口の所で顎に食らった頭突きが凄く快感で………ク
ラクラするくらい、一番気持ち良かったよ」

それは唯単に脳震盪のうしんどうを起こしかけてクラクラしていたんでしょう。
と、ツッコミたかった。

やはり、彼は真正しんせいの変態なのだと、認識を新たにした私なのであ
った。

04 (後書き)

大変お待たせ致しました！

「あの……ちょっと離れてください」

人通りが少ないベンチの上で、私はアレクさんの胸に手を当てて、これ以上近付いて来ない様に力を込めていた。

先程『M』のスイッチが入ってしまったらしいアレクさんは、椅子の背に両手を当てて、私をその腕の中に閉じ込めていた。

目元をうつすらと赤く染め、薄く開いた唇からは熱い吐息がこぼれ落ち、潤んだ瞳で私を見下ろすその姿は　目を逸らせないほど色っぽくて……。

子供達が賑わう遊園地内で、不健全な雰囲気をも全開に醸し出していた。

誰かに助けて欲しいが、こんな場面（はたから見たら、恋人同士のじゃれ合い）を見られたら見られたで、それは恥ずかしい。

どうしたらいいのぉ！？

顔を真っ赤にさせ、俯きながら両腕に力を入れていると、頭上でクスリと笑う声がした。

何を笑うか、と顔を上げれば……惚れられするほど整った彼の顔が目前に迫っていた。

「ひゃっ！？」

驚いて、彼を押さえていた手を緩めてしまった。

目の前の御仁は、その隙を見逃すはずはなかったのです！

「赤くなつて……可愛いね」

彼はそう言うと、突っ張っていた腕を片手で一掴みし、一瞬にして唇を合わせてきた。

唇に伝わる、温かくて柔らかな感触。

最初はただ押し当てられているだけであつたが、次第に下唇や上唇を食まれる。

あまりの事に目を閉じられずにいると 髪の毛と同じ色の睫毛を伏せたまま、チュツチュチュと人の唇にキスをしていた人が、スツと目を開けた。

「その小さくて可愛いお口を開けて、琴海ちゃん」

フツと笑い、唇を合わせたままそんな事を言うアレクさん。

耳にまた、チュツと言う音が聞こえて来た。

ん？ 『M』のスイッチが入ったはずなのに、なんか、今のアレクさんは『M』じゃないような……。

そんな事を思うも、今の私の思考は限りなく鈍くなっていた。

ふわふわとした気持ちいい気分のまま、私はアレクさんの言われた通りに、合わせていた唇を開ける。

私が従順に口を開けた時 アレクさんは顔の向きを変えると、背凭れに付いていた手を私の体に回した。

グツと近づくアレクさんの逞しい体。

甘いような、清涼感がある香水の匂いを吸い込みながら、ゆっく

りと瞳を閉じた時。

「ねえ、喉が乾いたから飲み物買ってきて!」

後ろから聞こえて来た声に、私は脊髓反射のような速さでアレクさんの頭を掴み、どこからそんな力が出たのかは分からないが、彼の頭を膝の上に無理やり押し付けた。

今……聞こえて来た声って……。

むご!？ と変な声が膝上から聞こえて来たのだが、今は無視です。

人の体に腕を回した状態で、モゾモゾと動くアレクさんの頭を両手で押し付けたまま、私はそうっと後ろを振り向いてみた。

私が座っているベンチの真後ろに、背を合わせた感じで同じベンチが置いているのだが、そこに向かって、とあるカップルが歩いて来る。

歩いて来るカップルの女性の方を見た私は、盛大に顔を引き攣らせた。

何で……あの美女軍団のリーダーがここにいるの!？

そう、アレクさんと少しでも御近付きになると、日々彼の周囲を取り囲む美女軍団のリーダー的存在の人が、パツと見冴えない男性を連れて、こちらに歩いて来るではないか!!

「ぶはあっ。……どうしたの? 琴海ちゃ わぶ!?!」

驚きで緩んだ手の下から顔を覗かせたアレクさんに、私は帽子を急いで脱ぐとそれを無理やり被せた。

そして、彼の顔を包む様にしながら私の膝に押し当てて、なるべくアレクさんの顔が見られないようにした。

人が今の私達を見れば、彼氏がベンチの上で彼女の膝の上で寝ている　様に見えるだろう。

「琴海ちゃん？」

「声を出さないでください！」

目深に被せられたニット帽を捲り上げ、きよとした顔で見上げてくるアレクさんに、私は小声で注意する。

すると、アレクさんはニット帽を被り直すと、ポスンと私のお腹に向かって顔を押し付けてきた。

むう？

じりじりとお腹に向かって押し付けてくる彼の顔をガシッと掴み、それ以上の進行を防ぐ。

なんて言うか、落ち着かない。

これ以上進まれば、股間に彼の顔が……！！

「ちょ、アレクさん！」

「……………」

小声で抗議しても、無視された。

しかも、私の体に回されていた腕に力が入り、しがみつかれる様な感じになった。

ちょっと、本当になんなんですか！

グググと、地味な攻防戦を繰り返していると　後ろのベンチにドカリと座る衝撃が、背中合わせになったベンチごしに伝わってきた。

「清美さん、何を飲みたいですか？」

「は？ そんな事もいちいち言わないと分かんないわけ？」

「す、すみません」

「ったく、使えないわね……。いいわ、冷たいレモンティーでも買ってきて」

「えっ！？ あのおく、レモンティーはここでは売ってないみたいですが……」

「もう！ 何でもいいから、早く買ってきてよ！」

「はいい！」

慌てたような足音が遠ざかっていくと、後ろからチツと舌打ち音が聞こえてきた。

「ホント、使えないヤツ。お金を持ってるからって付き合っただけだ……ここまでね」

「……………」

聞きたくないけど聞いちゃった言葉に、私は心の中で、怖っ！？ と叫んでいた。

美女軍団のリーダーこと、花田さん（本名は花田清美）が会社にいる時とは全く違う態度に驚きが募る。

美人で優しそうな外見に反して、中身はちょー我儘お嬢様みたいだ。

性悪そうな花田さんの実態を知った私は、ハタと動きを止める。

もしも、後ろに私とアレクさんがいるって知られたら。

次の日、会社で虐められること確定である。

女豹達（美女軍団）のギラギラとした視線を思い出す。

ドクドクと、かつて無いほどの速さで動く心臓。

アレクさんと一緒にいる時の、トキメクようなものとも、お化け

屋敷にいた時の怖かった時の心臓の動きとは違う　キューツと締め付けられるような……痛みが伴うものだった。
俯き、思考が悪い方へと沈みそうになった時。

そつと、頬に大きくて温かい手が添えられた。

驚いてアレクさんを見れば、アレクさんは声を出さずに口をパクパクと動かして『大丈夫だよ』と私に伝えると、ニット帽を深く被り直し、膝の上から顔を起こした。

そして、私の手を掴むと、スツと立ち上がる。

アレクさんはチラリと後ろを振り向き、花田さんが私達の方を見ていないのを確認すると、私をすっぽりと包み込む様にして、肩を抱きながら歩き出す。

未だ忙しく動く心臓。

アレクさんの腰辺りの服をキュツと掴めば、肩に回された手に力が籠る。

「ここまで来れば、大丈夫だろう」

人がざわめく大通りに出た時、アレクさんがそう言った。

「はぁ……まさか、こんな所であの人に会うとはね」

「ビックリしました」

「このままここにいれば、また会つかもしれないな」

「そうですね」

「そつだ。琴海ちゃん、これから俺の家に来ない？」

このまま帰るのも詰まらないし、DVD鑑賞でもして過ごさない？　と私を見下ろして聞いてくる。

もっ少し……アレクさんと一緒にいたいな。

そう思った私はコクリと頷き、彼の胸元に頬を寄せる。

初めて取った、私の甘えるような行動に、一瞬アレクさんは目を見開いた。

それから直ぐに、蕩けるような瞳で私を見詰めると、更に体を密着させるように私の体を引き寄せる。

キュンと高鳴る私の心。

初デートは、いい意味でも悪い意味でも、ドキドキの連続であった。

「はあゝ！？ 何もしなかったなんて…… ありえないっ！」

大きな声を出して驚くあっちゃんに、私は彼女の口を塞ぎ、「しいーっ！ あっちゃん声が大きいよ」と小声で注意をした。

「ぶはあっ。…… いやあゝ、ごめんごめん。あまりにもビックリしすぎちゃって」

「そこまで驚く内容かなあ？」

「…… あんた、蛇の生殺しって言葉、知ってる？」

「……………」

給湯室の片隅で、私とあっちゃんはコソコソ話しをしていた。

何の話しをしていたのかと言えば。

あの日、アレクさんと初デートをした日の事である。

「このまま帰るのも詰まらないし、DVD鑑賞でもして過ごさない？」

と誘われ、そのままアレクさんと一緒に帰った私。

アレクさんの家に着いた頃には、丁度夕食の時間帯になり、彼の手料理が振るわれた。

美味としか言いようがない料理の数々に、箸が止まらない。

しかも、「この料理にとっても合うんだよ」と言われて出された白ワイン（年代物）を、（お酒が強いワケでもないのに）グビグビと飲んでしまい……。

肉体的&精神的疲労でとっても疲れていた体と脳に、美味しい料

理とアルコールを摂取した事により、

寝てしまったのよお。

ガクリと頂垂れる。

自己嫌悪に浸る私に、追い打ちを掛けるあっちゃん。

「ここまでお子ちゃまとはねー」

「うぐっ」

「アレクさん、さぞや呆れたでしょね」

「……あうう」

「琴海、あまりにもお子ちゃまな行動ばかりしてると……涎を垂らしている女豹達に、横から搔つ攫われるわよ？」

最後の言葉に、ええ！？ と驚きの声を発してしまった。

その瞬間、あっちゃんに口を塞がれた。

「しいーっ」

「……ごふえん」

むごむごと言いながら謝れば、ふうつと息を吐いたあっちゃん。

実は私、アレクさんと付き合っていることを、あっちゃんにだけは話していた。

私の数少ない 心から信頼出来る友人だから。

でも……あっちゃんの口から出て来る心を抉るような言葉に、たまに凹みそうになるけどね。

「酒が強くもないのに、なあ〜んでそんなに飲んじやったのさ」

「えっと……アレクさんが勧めてくれた白ワインが、思いのほか美

味しくて……」

「ふうん。もしかしてアレクさん……この子を程良く酔わせて、先に進もうとしていたのかしら？ ……まあ、そうだったら、策士策に溺れるだわね」

自分の足元を眺めながらもゴモゴと喋っていると、頭上であつちやんが何やら呟いていたが、最後の方は声が小さくてよく聞こえなかった。

仕事もそろそろ終わる頃になると、美女軍団が数人ずつお手洗いに行つては、落ちかけたメイクをバッチリ元に戻して、綺麗な顔になつて自分の席へと戻つて来る。

ナチュラルメイクの私は、あの小さなポーチの中にはどんな魔法道具が入っているんだろうと、いつも思う。

携帯をチラリと見ながら、PCのメールをチェックして電源を切つた。

「お疲れ様でしたー」

まだ仕事をしている人達に頭を下げてから、私は更衣室に直行した。

更衣室に行けば、数人の女性達が着替えながら話し合っている姿が見える。

私は自分のロッカーの扉を開けると、私服へと着替える為にスーツを脱いだ。

くく。

着替え終わると同時に、携帯が鳴った。
慌てながら携帯を開くと。

『アレク』

彼の名前が液晶画面に表示されていた。

私は一度パタリと携帯を閉じると、回りに誰もいないか確認する。名前を登録するとき、アレクさんに「俺達は付き合っているんだよ？　今直ぐに呼び捨てで呼んでは言わないから……せめて、コレだけでも『アレク』と入れてくれないかな？」と言われていた。携帯の名前の所からアレクさんと付き合っていることがバレたらと考えるだけでも恐ろしいけれども、イケメンの笑顔＆美ボイス付きでは、拒否出来無かった。

NOとは言えない日本人気質な私なのである。

そんな私であるが、好きな彼氏から送られてきたメールにはトキメクのだ。

私はコソコソと隠れながら、受信BOXを開いて内容を確認する。そこには。

『お疲れ様、琴海ちゃん。もう仕事終わった？　終わったなら、地下の駐車場で待ってるから一緒に帰ろ？』

と、あった。

私はババババッ！　と鞆の中に物を入れると、ロッカーの扉を

締めて更衣室を出た。

廊下を早歩きで歩きながら、携帯を操作する。

『お疲れ様です。仕事、今終わりました。これから駐車場に向かいますね』

送信ボタンをポチッと押して、「送信されました」と言う文字が出てから携帯を閉じる。

私は携帯をコートのポケットに仕舞ってから、地下に行くエレベーターへと少し駆け足で向かった。

それから10分後。

エレベーターを降りて地下の駐車場に行けば、車には疎い私も高級車であろうと分かる車が、ずらぁりと並んでいるのが目に入る。

そう言えば、うちの会社は重役や一部の人間しか車出勤は許されていないかったはず……。

そんな事を思いながら、アレクさんは何処にいるのかと途方に暮れながら辺りを見渡していると。

「きゃっ!?!」

突然、後ろから誰かに抱き締められた。

ビックリしながら後ろに振り向けば。

「琴海ちゃん」

柔らかく微笑むアレクさんの顔が、私の顔の直ぐ側にあった。

細いように筋肉質な長い腕を私のお腹に回し、首筋に顔を埋める。

「ううっ。久々の琴海ちゃんの匂い……癒される……」

「にお……」

ぎゅぅっつと私を抱き締めながら、アレクさんは深い溜息をした。
「もっ、何だつて俺の回りには化粧品や香水の匂いやらが濃い人しか寄って来ないのかな……」

顔を埋めながら鼻をスンスンと鳴らし、「はぁぁ。いい匂い」と言っアレクさんに、微妙な心境になる私。

今の私は香水なんて一切付けてないし、仕事終わりで汗も掻いている。

女心としては……体臭が気になるので、離れて欲しいのですが。

「あの、あの！ アレクさん！」

「……ん？ 何だい？」

「あのお、その……今の私、仕事終わりで汗臭いかもしれないので、あまり匂いを嗅いで欲しくないのですが」

「ああ、そんな事？ 大丈夫だよ」

首元から顔を上げたアレクさんは、清々しい表情でこう言った。

「俺、においフェチでもあるからさ」

……今、聞いているイケナイ言葉を聞いてしまったような？

ピキッと固まる私に、「汗の匂いも、そそられるよねー」と笑顔で言われても、頷けない。

アレクさんはもう一度私の首筋に顔を埋め、スウッと息を吸い込むと、

「琴海ちゃんの匂いは……甘くていい香りがするね」

「ひゃうっ！？」

温かい感触がしたと思ったら、首をちゅうつと吸われた。驚いて、吸われた場所に手を当てると、少し濡れていた。

「な、ななななっ!？」

「クスクス。これくらいいいでしょ？ 昨日、我慢したご褒美を貰っても」

「……うっ」

アレクさんの言葉に、詰まる私。

痛い所を突かれてしまった。

あうあうあう、と真っ赤になりながら狼狽していると、フツと笑ったアレクさんが私の手を取って歩き出した。

「今日は、帆立のバター炒めと、さといものそぼろ煮と、アスパラガスのえびマヨネーズあえ。それから、新ごぼうとかぼちゃのみそ汁なんだ」

期待してて、と言うアレクさんに、引き攣っていた顔もほにやりと綻ぶ。

彼が作る料理は凄く美味しいのだ。

普通、女性が男性の心を自分の所へ繋ぎ止めておく為に、料理の腕を上げて「男の胃袋を掴む」筈なのだが……私の場合、男であるアレクさんにかつちりと胃袋を掴まれてしまっていた。

「お腹、空きました。アレクさんが作る料理、早く食べたいです」指を絡める様にして握られた手を、キュッと握り返す様にしながらそう言えば、アレクさんが優しく微笑んだ。

アレクさんのエスコートで近くに置いてあった車（左ハンドルの外車）に乗り込むと、私達はアレクさんの家へと向かったのだった。

だから、私達は気付かなかった。

仲睦まじく車に乗り込んで、駐車場を出て行く私達を柱の物陰か

らジーツと見詰めていた人物がいた事に。

アレクさんのお家に入ると、玄関にはアレクさんの帰りを待っていたエルダー君が、尻尾を左右にパタパタと振って出迎えてくれた。「こんばんは、エルダー君」

頭を撫でようとしたら、エルダー君はバタリと床に倒れ込み、お腹を出して「撫でて撫でてっ！」と期待に満ちた瞳で見詰めてきた。私はホニヤリと相互を崩して、エルダー君のお腹を「よしよし」と言いながら撫でまくった。

エルダー君をナデナデしながら、疲れた体と心の癒しだわ〜と思っ

「なんか、妬けるね」

後ろに立っていたアレクさんがしゃがみ込み、私の耳元でソッと囁いた。

「ひゃう!？」

両手でバツと耳を抑えながら後ろを振り向けば、「あれ？ 感じちゃった？」と言いながら艶やかに笑うアレクさんがいた。

「ななな、何をっ!」

「ごめんごめん。それより、こんな所に長居していないで中に入るっ?」

「……うう……はい」

靴を脱ぎ、エルダー君を引き連れて家の中に入って行くアレクさんの後を追うようにして、私も家の中に入って行った。

どうして、この人はこんなに美味しそうな料理を作れるのだろうか？

私の目の前には　。

香草バター風味のホタテのグリル焼き。

外はカリカリ中はジューシーに焼き上げられた鶏肉に、オレンジソースがかけられた料理。

フォアグラのクレームブリュレに、その隣には味付けされたアボガドやトマトやエビ、それに数種類のフルーツが、カクテルグラスに盛り付けられていた。

そして、シャンパングラスに入った、綺麗な色のシャンパンゼリ―が並べられていた。

女として負けている。

美味しそうな品物の数々を目の前に頂垂れていると、エプロンを脱いだアレクさんが「どうしたの？」と声を掛けて来たので、何でもありませんと首を振る。

「とっても美味しそうです」

「そう言ってもらえて嬉しいよ」

ナプキンの上にナイフとフォークが置かれ、アレクさんに「どうぞ召し上がれ」と言われた私は、「いただきますーす！」と言いなから、大きな口を開けてアレクさんが作った絶品料理を食べ尽くしたのであった。

こんなに美味しい料理を食べ慣れちゃったら……私、アレクさん

から離れられなくなっちゃうかも。

そんな事を考えながら、暇な時にでも料理教室にでも通おうかしらと悩む私であった。

「おいで、琴海ちゃん」

2人で食後の片付けをし終わり、ひと休みしようとした時。背凭れが付いた大きめなクッションに座ったアレクさんが、まだ立っていた私に手を差し伸べてきた。

キョロキョロ辺りを見回し、それからもう一度アレクさんの顔を見る。

恐る恐ると言った感じに差し伸べられた手に自分の手を重ねると。

「きゃっ!？」

握られた手に力が込められたかと思ったら、グイッと腕を引かれ、私はそのままポスンとアレクさんの胡座をかく脚の間に座らせられた。

ふわり、と香る香水の香りと、掌や体全体に感じられる相手の体温に　私の心拍数は爆発的に上がる。

こ、ここに、これはもしかや、恋人同士のイチャつきを……体験しているのかしらっ!？

ドキドキしていると、アレクさんは私の腰に腕を回して抱き締めながら、そのまま私の頭に頬をくっ付けて擦り寄った。

細いけれどしっかりと腕に抱かれ、自分の体がアレクさんの

腕と広い胸板にすっぽりと包まれると　不思議な安心感が生まれてくる。

「大好きだよ、琴海ちゃん」

「……あの、あの……はい。私もです」

男の人とお付き合いするのも初めてで、『甘える』行為なんて、どのようにしていいのか分からなかったけど……まずは、私もアレクさんの体に腕を回してみる。

ピクリ、とアレクさんの体が震えた。

私は、自分の顔をアレクさんの胸元にスリスリと擦り付けてみた。

うわぁ……これって結構恥ずかしいかもあつ！

緊張と恥ずかしさで、無意識にアレクさんの服をキュツと握ってしまうと。

「はぁ……っ。もう、たまんない」

アレクさんは私の頭から顔を離すと、チュツと旋毛にキスを落とした。

「ずっと……琴海ちゃんとうして触れ合ってみたかったんだ」
下ろしている髪を指に絡めながら何度も軽いキスを頭に落としていく。

それから、ふう〜と軽く息を吐き出した。

「なんだろ、琴海ちゃんの匂いを嗅ぐと、とつても落ち着く……」

「……ほえ？」

……に……匂い？

アレクさんの胸元に顔を擦り付けながら目をパチパチと瞬かせていると……。

くんくんくん。

私の頭上　頭頂部から匂いを嗅ぐ音がした。

え？　ええっ！？　もしかして、アレクさん私の頭の匂いを嗅いでるのお！？

今までの安心感も何もかもが吹き飛び、私は仰天した。

今日は重い資料運びをしていたりと、結構汗をかいていた。

うきやあー！？　絶対汗臭いに決まってる！

そんな汗臭く頭をくんくと嗅ぐなんて……。

「やゝあー！」

「むごほおっ！？」

これ以上頭の匂いを嗅がれなくなかった私は、頭を上突き出した。

その結果、私の頭を嗅いでいたアレクさんは、顔面にもろ頭突きを食らってしまった、変な声を出しながら頭を仰け反らしてしまった。腕が緩んだ隙に、彼の元から離れようとしたのだが、持ち直した彼にすかさず片手で腰元を抱かれてしまい、逃げる事が出来なかった。

「やつ！？　離してバカっ！　変態っ！！」

腕を突っ張り、離れようと試みるも、コレがなかなか上手く行かない。

しかも、頭突きをしてしまったことで又しても何かのスイッチが入ってしまったのか、仰け反らせていた顔を元に戻したアレクさんは……異常なほど興奮していた。

「はふう……。……もう俺、いつ来るか分からない琴海ちゃんの愛ある行為に、スッゲー胸がドキドキする。こんな事、今まで生きて来た中で初めて。癖になりそう　いや、もうなっているかな」

たたり……と鼻から流れる真っ赤な血に釘付けになりながら、私はアレクさんの言葉を聞いていたのだが。

「ああ、琴海ちゃん。もつともつと俺を貶して……罵倒して……気持良く感じるほど　傷めつけて？」

どう見ても、違う意味で私の事を熱い瞳で見詰めるアレクさんに、私の顔は引き攣るばかり。

「いーやあーっ!？」

彼から逃げるべく、悲鳴を上げながらバタバタと腕やら脚やらを振り回していると。

「何をしているの!？」

ボタンっ！とドアがけたましく開かれた音がしたと思ったら玄関に通じるドアから、焦った表情をした人が入ってきた。

驚いて目を向けると、そこには、これまた驚くほどオットコ前な外人さんが、目を極限まで見開いて私達を凝視していた。

「んなっ!？」

「……あ」

「へ？」

闖入者＋アレクさん＋私のそれぞれの口から、音が漏れた。そして。

「嫌がる未成年者に何をしとるんだ貴様はあー!!!」

突っ込みどころ満載の叫びが、部屋中に響き渡った。

「お前……何でここに……？」

急に入って来た女性を2人でポカンとした表情で見上げていると、その人はアレクさんの言葉を無視して、胸元まで伸ばされているアレクさんと同じプラチナシルバーの髪の毛を、溜息をつきながら掻き上げた。

そして、細長くて綺麗に手入れされている眉毛をギュッと寄せて、アマゾナイトの様な瞳で私達を睨み付けて来た。

び……美人さんが怒ると本当に怖い。

しかも、そんな人がですよ？ そんな人が、怖い顔をしてドカドカと足音を立てながら近付いて来たと思ったら、長く綺麗に伸ばされた爪（鋭そう！）がやたらと目に入る手をこちらに伸ばしてくるではないですか！？

叩かれる！ と思った私がギュッと目を瞑ると。

両脇に手が添えられる感覚がしたと思ったら、体がフワリと浮いた。

「にやつ！？」

驚いて変な声が出てしまいました。

何事かと思いながら急いで目を開けると、私の目の前には顔を引き攣らせたアレクさんがいた。

「おいっ！」

「うっさい変態。嫌がる未成年者に、何てことしているのよ貴方は」
慌てて手を伸ばして私を取り戻そうとするアレクさんに、冷たい
声を出しながら体を捻ってその手から私を遠ざける。

そして、

「怖い思いをしたのね……でも、私が来たからもう大丈夫よ？」

と、心配そうな表情をしながら顔を覗かれた。

後ろから抱き付かれ 胸の下と腰辺りに回された手にギュッ

と抱きしめられた私は、目をぱちぱち瞬かせる。

私をすっばりと包む、ガツチリとした腕と大きな掌。（ん？）

背中に当たる、固い胸。（あれ？）

見た目は細いけど、意外に広い肩や腰回り。（あれれ？）

見上げた時にチラリと見えた、喉の『出っ張り』。（あれれれ？）

女性にしては、少し低いハスキーな声。（えーっと？）

そして、密着した体からは、男性が使いそうな香水の匂いがフワ

リと香ってきた。（……………これはもしや？）

「こんな涙目になっちゃって。可哀想に」

ぽやぽやと頭の中で考え事をしていたら、クルリと身体の向きを
変えられ それから、顎を指で持ち上げられて目尻に溜まった
涙を親指で拭き取られた。

「……あ」

顔を指で持ち上げられ、“あるモノ”を発見してしまった。

……あ……顎の下に、数本の“剃り残し”が！？

女性では有り得ない太さの“剃り残し”に、この人が『男性』なのだと思い付いてしまいました。

その事に気付いてから、私は今の状況にハタと気付く。

見知らぬ男性に腰に手を回せながら密接にくっ付き合い、顔を寄せられているのだ。

カア〜つと顔が熱くなる。

「あ、あの、あの、ちよつと離れ……」

「クス……かわいい。真っ赤になって……照れてるのかしら？」

どうやら、見た目や話し方だけで女性だと決めつけていましたが……れっきとした男性だったみたいです。

しかし……何故でしょう？

変態の魔の手から助けくれた方のお顔が……段々近付いて来るのですが……。

いつの間にか移動していた手が、私の両頬に添えられた。

そして、添えられている手に少しだけ力が入り、顔を上にクイツと上げられる。

眼の前に広がる美人さんのお顔が、少しだけ傾いた。

あ、唇の左端にホクロを発見。うわあ、睫毛なっが！

近付いて来る美人さんのホクロなどを見ながら、色っぽいなあ〜と現実逃避をしていたら。

「お前、いいがげんにしろよ」

初めて聞く、アレクさんの不機嫌さを滲ませた声が聞こえて来た
と、思ったら。

「ふぎゅっ!？」

お腹に急激な圧迫を受けて、変な声が出てしまいました。
くるじい……と涙目になっていると。

いつも嗅ぎ慣れている香水の匂いに包まれる。

そう、私はアレクさんの腕の中に舞い戻っていたのであった。
抱き締め慣れた腕の感覚に、ホツと身体力が抜けた。

アレクさんの腕の中にいる私と、不機嫌さMAX! なアレク
さんの顔を交互に見たその人は。

「あら……オホホホホ! 私とした事が、その子の余りにも初な反
応に、うっかり『もう一つの顔』が出てきちゃったみたい」

「何がオホホホホ! だ! 人の彼女に何をする気だったんだよ!
!」

「えーっ!? この子が彼女!? ……アンタ、DMだけじゃな
くて、ロリコン変態でもあった!? いーやあー! 気持ち悪っ
!」

「だれがロリコンだ! 琴海ちゃんはこんな幼くも可愛らしい外見
をしていると、22歳の成人女性だ」

「うっそ………まだ、16〜17歳だと思ってたわ」

私を見て、心底驚いたと言う顔をする人物。失敬な。

どう聞いていても、私を貶しているんですか? と言いたくなる
ような話し合いをしている2人に、私は溜息をつきながら口を開い
た。

「あの、アレクさん、この方はどなたなんですか？」

至極真つ当な事を言った私に、アレクさんはやつと説明し忘れて
いることに気付いたらしい。

目の前の人物を溜息を突きながら説明してくれた。

「コイツは、ディミトリ・シーヴァー。趣味が女遊びと女装と言う
俺の従兄弟」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7752/>

気になるアイツは.....M男！？

2011年8月23日02時30分発行